

19世紀後半ロシア帝国ヴォルガ・ウラル地域のマドラサ教育

磯貝真澄

はじめに

ヴォルガ中下流域とその東方に位置するウラル南麓、西シベリア、そしてカザフ草原北端におよぶ地域に居住するテュルク系ムスリムを対象とする近代史研究において、教育をめぐる問題は最も重要なトピックの1つである。1880年代初めバフチサライで、クリミア・タタール知識人のイスマイル・ガスプリンスキー（イスマーイーール・ガスプリーンスキー、Ismā'il Ghaṣprīnski, 1851~1914）が、ロシアのテュルク系ムスリム社会で伝統的に実践されてきた教育方法を改革し、「新方式 (uṣūl-i jadīd)」の教育として普及させる活動を始めた。これがヴォルガ・ウラル地域のテュルク系ムスリム知識人らに受容されると、教育のみならず社会の多岐にわたる問題について様々に改革論を唱道する知識人らが、総じてジャディード (jadīdchī, джадидист) と呼ばれるという状況が生じた。つまりヴォルガ・ウラル地域のテュルク系ムスリム知識人らによる改革運動は、教育改革論を契機として勢力を得たのである。それゆえ教育問題は当該地域の近代史研究上、極めて重要なテーマであり続けてきた¹⁾。

だが新方式教育が研究対象として脚光を浴びる一方、それ以前の教育をめぐる問題については、しかるべき研究が行なわれてこなかったと言ってよい。アメリカの研究者フランクが指摘したように²⁾、先行研究のほとんどにおいて長らく、新方式以前の伝統的な教育は、ジャディードに対抗するカディーム (qadīmchī, кадимист), すなわち守旧派が保守しようとしたものとして否定的に形容されるにとどまってきた。しかし後述するように、1990年代半ば以降、伝統的な教育の実態を、より適切な一次史料に依拠して解明しようとする研究が発表されつつある。現在、「伝統的なもの=保守=否定すべきもの」と「革新的なもの=改革=肯定すべきもの」との絶対的な二項対立を措定し、後者が前者を打破・克服す

-
- 1) 新方式教育がトルキスタンのテュルク系知識人らにも受容されたため、トルキスタン近代史研究においても教育問題は重要なトピックである。わが国の研究としては、まず小松 1996; 大石 1996を見よ。
 - 2) フランクは、先行研究が「モダニストの、進歩的で、『西向きの』ジャディード教育」と『『伝統主義的』、スコラ主義的、反啓蒙主義的、反動的なカディーム教育』の対立の構図を提示し、それがあたかも「改革と反動のあいだの『永久不変の』対立」であったかのように説明してきたとして、鋭く批判する [Frank 2001: 218-219]。

るという、単純かつ、ある種典型的な図式に囚われることなく³⁾、「改革」以前を明らかにする研究を進める必要がある。

以上のことを踏まえ本稿は、19世紀後半、新方式教育が普及する直前のヴォルガ・ウラル地域におけるマドラサ教育の実態の解明を、第1の目的とする。特に、教授・学習に利用された書物と、それにより構成された教育課程がいかなるものであったかを明らかにする。主要史料は、1860年代半ばから1880年代末に当該地域で伝統的なマドラサ教育を受けた改革論者のウラマーであるリザエッディン・b・ファフレッディン（リダーウッディーン・b・ファフルッディーン、Riḍā' al-Dīn b. Fakhr al-Dīn b. Sayf al-Dīn, 1858～1936, 以下、本稿ではリザエッディンと記す）が、1905年に執筆した自伝の手稿 [HA PT: φ. 1370, оп. 1, д. 27] である。これを史料としてマドラサ教育の実態を研究する意義は2つある。1つは新方式教育が普及する直前の時期のマドラサにおける教育内容を、1人のムスリムが学習を始めてから終えるまでのひととおりのプロセスとして、詳らかにし得ることである。いま一つの意義は、これが改革論者ウラマーを代表する存在であったリザエッディンの活動や思想を研究するための基礎的な作業となることである。さらに本稿は、ロシア帝国の行政下にあった当該時代地域のマドラサで、ムダッリス等の資格を公認されて教師を務めようとする人々が受験せねばならなかった、資格審査試験に関連する諸々の史料もあわせて検討することにより、マドラサ教育の目的やその社会的機能をも考察することとする。

なお本稿でいうヴォルガ・ウラル地域のマドラサとは、イスラーム諸学を教授する寄宿制の高等教育施設のみならず、クルアーン暗唱等の初等教育のための施設も含む。なぜなら当該地域ではしばしば、高等教育施設とこれに付随する初等教育施設の総称として、マドラサ（現代のタタール語、バシキール語からカナ表記すればそれぞれメドレセ、メゾレセ）という呼称が用いられたからである⁴⁾。また日付は露暦による。

I 先行研究と主要史料

1 先行研究

ヴォルガ・ウラル地域、すなわちおよそ現在のロシア連邦タタルスタン、バシコルトスタンの両共和国とその周辺にあたる地域では、ソ連時代より、タタールやバシキールの歴史研究者らによる教育史研究が行なわれてきた。しかしそれらにおいて新方式以前の伝統的なマドラサ教育は本格的な研究対象とされず、ただ新方式教育の歴史的な前提として否定的に言及

3) 近年の研究から例を挙げれば、Dudoignon 1997; 長縄 2003 は、20世紀初頭のムスリム知識人の活動や思想について、ジャディードとカディームの絶対的な二項対立という図式にあてはまらないような歴史的事例を提示する。

4) マクタブの語は、特に初等程度の教育のみを実施する学校について使用されたと考えられる。

されるのが常であった⁵⁾。ソ連解体後、1990年代半ば以降、伝統的なマドラサについて比較的詳しく解説する研究が徐々に現われるが、まとまった研究は唯一、1860～90年代のバシキリアにおける教育をテーマとしたФархшатов 1994のみと言えよう。このファルフシャートフの研究は、特に行政文書等のロシア語史料を用いて、マドラサ、マクタブの数や、教師数、学生数等々を推定し、教育課程や学生生活について概説する。そして多様な、しばしば相互に矛盾する史料を論理的に批判・検討しつつ、伝統的なマドラサやマクタブのありかたについて従来のように単純に否定するのではなく、客観的に叙述しようとする。しかし本稿が特に明らかにしようとする、マドラサで利用された書物とその教育課程について、この研究はヴォルガ・ウラル地域のみならずトルキスタンやその他の地域の状況もあわせて記述された史料等に依拠しており、この点には注意する必要がある [Фархшатов 1994: 54-77]。

一方、欧米の研究者ではドイツのケムパーがKemper 1998において、現在サンクト・ペテルブルグやヴォルガ・ウラル地域の図書館等に所蔵される写本類をもとに、18～19世紀のヴォルガ・ウラル地域のマドラサで利用されていたであろう書物を、その正式な名称、著者、その書物の属す学問分野等の情報とともに提示した。しかしケムパーはそもそも、マドラサにおける教授・学習プロセスとしての教育課程を解明することを目的とせず、そこで利用されたとみられる書物の情報を示すにとどまっている [Kemper 1998: 215-220]。

また、アメリカの研究者フランクはFrank 2001で、マドラサ教育を重要なトピックの1つとして取り上げた。この研究は、サラトフ市の東南を中心としカザフ草原北西端におよぶ農村地域の歴史を叙述する『アルトゥ・アタ史 (Tawārikh-i Āltī Ātā)』の検討を主眼に据えており、マドラサ教育についても、この史料から多数の興味深い事例を提示する。しかし本稿が扱う書物や教育課程の問題について、フランクは基本的に上述のKemper 1998と、伝統的な教育を厳しく批判する立場にあったタタール知識人ジャマール・ヴァリドフ (Джамал Валидов, 1887～1932) によるВалидов 1923から得られる情報をあわせ、整理するのみである。このВалидов 1923は、ヴァリドフがタタール語で著した作品がロシア語に翻訳され、1923年に出版されたものである。そのオリジナルのテキストは現存しない。このような史料的価値を減ずる条件を備えるにもかかわらず、Валидов 1923は、その情報量の多さと、ロシア語で読むことができるという手軽さゆえに、多数の先行研究で利用されてきた。だが、この著作にみられる伝統的なマドラサ教育についての記述は、著者ヴァリド

5) 一例として、教育史研究の先駆であるマフムートヴァの『タタールにおける世俗教育の形成 (学校問題をめぐる闘争, 1861～1917)』は、新方式以前の教育について、「旧方式のタタールの学校」という章を設けて解説する。しかしこの研究はそもそも「世俗教育の形成」過程を肯定的に詳述することを意図しており、「旧方式」については、新方式とは絶対的に相容れないものとして否定的に記述する。そして史料に、「旧方式」教育を批判する立場にあった者らによるテキストを利用し、その批判的言辞をそのまま採用する。しかしながら、この研究は個々の歴史的事実について多くの有益な情報を含んでおり、現在でも必ず参照すべきものである [Махмутова 1982]。

フが上述のようにこれに否定的であったこと⁶⁾、さらにヴァリドフ自身が修学したマドラサが一定程度のカリキュラム改革を経たものであったことから⁷⁾、その内容を無批判に受け入れることはできない。すなわち現在のところ、19世紀後半ヴォルガ・ウラル地域の伝統的なマドラサについて、教授・学習の過程としてのカリキュラムを、1人のムスリムの経験に基づく記録から得られる情報に依拠しつつ整理し、かつ教育に利用された書物自体の情報も含めて提示する研究は、管見の限り、存在しないのである。

次に、本稿が利用する主要史料の著者であるリザエッディンについての専論であるが、まとまった研究は、筆者の知る限り、Баишев 1996; Хөсәйенов 1997; Türkoğlu 2000 の3点である⁸⁾。このうちБаишев 1996 は、リザエッディンの思想を分析する研究として高い価値を有するが、彼がマドラサで経験した教育の内容については具体的情報に乏しい。Хөсәйенов 1997 は、専門的研究書というよりも一般書に近い体裁の、豊富な情報を含む伝記的研究である。しかしこれもやはり、リザエッディンが経験したマドラサ教育の内容について説明するものではない。これらと比較して Türkoğlu 2000 は、特にリザエッディンの活動業績を詳しく解説するものであり、マドラサで初等程度の教授・学習に利用された書物と、その教育課程についても具体的に説明する。だが、その典拠には曖昧な部分がある。さらに高等程度の教育内容については、この研究も上述の2点の研究と同じく、具体的情報に欠けている [Türkoğlu 2000: 26-49]。つまり、リザエッディンの活動や思想を分析する諸々の先行研究において、彼が経験したマドラサ教育の詳細は、それが彼の思想形成における重要要素であったと考えられるにもかかわらず、必ずしも明らかになっていないのである。

以上のような研究状況に鑑みれば、本稿は19世紀後半ヴォルガ・ウラル地域の伝統的なマドラサ教育についてのみならず、知識人研究としてのリザエッディン研究の分野でも、一定の意義を持つものとなるう。

2 主要史料

まず本稿の主要史料の著者であるリザエッディンの経歴を概観し、次に史料そのものについて簡単に説明することとする。

リザエッディンは、1858年12月31日、サマーラ県ブグリマ郡キチュチャトヴォ（ユル

6) この点はすでにフランクが指摘している [Frank 2001: 219-220]。

7) ヴァリドフが学んだのはヴァトカ県サラプル郡イジ・ブビ村（現タタルスタン共和国アグリズ地区）に存在したブビのマドラサである。このマドラサは1890年代半ば以降、1912年初めに閉鎖されるまで、当時としては相当ラディカルなカリキュラム改革を進めたことで知られる [Махмутова 2003]。

8) リザエッディンの活動や思想については、Хусаинов и др. (ред.) 1988; Әмирханов и др. (ред.) 2003; Хисамитдинова и др. (ред.) 2006; ФЧ 1; ФЧ 2 等、論集も多数公刊されている。また近年では、Байбулагова 2006 のように、リザエッディンの活動や思想における個別の問題にアプローチする専門的研究書も現われている。

ダシェヴォ)村(現タタルスタン共和国アリメティエフスク地区)のイマームの家に誕生した。彼は幼少のうちにはイマームである父親とアブスタイ(ābiṣṭāy)⁹⁾である母親から教育を受け、1865年秋、7歳になる頃、故郷の村に近いニージニエ・チェルシルィ村(現レニノゴルスク地区)のマドラサで学び始めた。1867年秋から68年春、彼は義兄ギルマーン・ケリミー(カリーミー, Ghilmān b. Ibrāhīm al-Karīmī, 1841~1902)に連れられ、チストポリ市のマドラサに移る。しかし1869年秋、彼は再びニージニエ・チェルシルィのマドラサのシャーキルド(学生, shākird, shāgird)となり、以後は基本的にこのマドラサで勉学に励むこととなった。彼は1889年春まで、原則として毎年秋から春の時期にマドラサで寄宿学生生活を送り、夏は自宅に戻って学問を修めた。

リザエッディンは20歳を過ぎると、イスラーム改革論に深く関係する文献を読み始める。1880年代、彼はイスラーム改革論者のウラマーとして知られたシハーブッディーン・メルジャーニー(マルジャーニー, Shihāb al-Dīn al-Marjānī, 1818-1889)の思想に親しむようになっていた。またリザエッディンは1884年、新聞『翻訳者(Tarjūmān)』(バフチサライ, 1883~1918)の購読を開始し、その編集発行者ガスプリンスキーと交際し始め、新方式教育を支持するようになる。なお、この時期のリザエッディンはニージニエ・チェルシルィ村のマドラサで、ハルファ(khalifa, khalifa)¹⁰⁾として他の学生らを教える立場にあったと考えられる。1880年代後半になると彼は、農村のマドラサでは得ることのできない、自らにとっての新しい知識を求めて行動する。彼は1886年、メルジャーニーに会うためカザン市に赴き、1888年にはサンクト・ペテルブルグに旅行して、イスラーム改革思想活動家のジャマルッディーン・アフガーニー(Jamāl al-Dīn al-Afghānī, 1839~1897)と面会した。彼はさらに、エジプトでイスラーム改革論を展開したウラマーのムハンマド・アブドゥ(Ṣaḥab al-Dīn Muḥammad 'Abduh, 1849~1905)や、辞事典の編纂を中心とした業績で知られたオスマン知識人シムセッディン・サーミー(シヤムスッディーン・サーミー, Shams al-Dīn Sāmī, 1850~1904)らの著作をも読むようになった。

さてリザエッディンは、1887年、ウファ市のオレンブルグ・ムスリム宗務協議会(Оренбургское магометанское духовное собрание, ОМДС)¹¹⁾で資格審査試験を受け、

9) アブスタイとは、マハッラの女性らの相談を受けたり、ごく若い男子や、女子の教育を行なったりする女性である。通例、イマームの妻であった[Kefeli 1997a; 1997b; 2001; 磯貝(生田)2009: 23]。

10) 当該地域のマドラサにおけるハルファについては後述するが、Frank 2001: 236-241の詳細な解説も参照せよ。

11) オレンブルグ・ムスリム宗務協議会は、エカテリーナ2世の勅令に基づき1789年にウファ市で開設され、ヴォルガ・ウラル地域と西シベリアのムスリム行政を管轄した行政機関である。19世紀後半には、基本的に内務省の異国宗教宗務局(Департамент духовных дел иностранных исповеданий)管下にあった。その組織はムフティーという職位の協議長1名と、カーディーと呼ばれる協議員3名、書記や通訳官らで構成された。すなわちここで、ムフティー、カーディーとは官職名である。そしてマドラサやマクタブは、実質的にこの宗務協議会の管轄の下にあった。

イマーム・ハティーフとムダッリスに適格と認められる。そして1889年春、彼は20年以上に及んだマドラサ生活に終止符を打ち、サマラ県庁より赴任することを認定されたブグリマ郡イリビャコヴォ村（現アズナカエヴォ地区）でイマーム職に就いた。しかし彼がそこでイマームを務めた期間は1年半ほどであった。1891年、彼はウファの宗務協議会でカーディーとして勤務することとなる。彼が若くしてカーディーに任じられた理由は、イスラーム諸学に通暁していることが評価されたためとされる。その後彼は15年ほどカーディーを務め、その間に自らの著作を公刊したりしたが、1906年、退職してオレンブルグ市に移ると文筆活動に専念し始めた。彼が1908年から雑誌『シューラー（Shūrā）』（オレンブルグ、1908～1917）の主筆を務めたことは、周知のとおりである¹²⁾。

すなわちリザエッディンは、1860年代後半から80年代末という、当該地域に新方式教育が普及する直前の20年余りの期間にわたってマドラサ教育を経験し、学識あるウラマーとしての評価を得た人物であった。

ところで本稿の主要史料である彼の自伝とは、彼が甥のファーティフ・ケリミー（ムハンマドファーティフ・カーリミー、Muhammadfatih al-Karimi, 1870-1937）¹³⁾に書き送ったもので、現在タタルスタン共和国国民文書館（Национальный архив Республики Татарстан, НА РТ）のケリミーのフォンドに保存されている [НА РТ, ф. 1370, оп. 1, д. 27]。その内容から、リザエッディンがこれを執筆した時期は、1905年7月末から9月前半、すなわち彼が宗務協議会のカーディーを辞める1年足らず前と推定され得る¹⁴⁾。つまりこ

¹²⁾ (1874年以降は、法的に教育省管下とされた)。ただしマドラサやマクタブが国家財源により運営されていたわけではない。詳しくは、長縄 2004; Naganawa 2006; Азаматов 1999; Азаматов 2006; Фархшатов 1994: 42-45 を見よ。

12) 以上、リザエッディンの経歴については主に [Баишев 1996; Türkoğlu 2000] の先行研究、および本稿の主要史料である彼の自伝 [НА РТ, ф. 1370, оп. 1, д. 27] による。なお、筆者はロシア科学アカデミー・ウファ学術センター学術文書館（Научный архив Уфимского научного центра Российской академии наук）が所蔵する、わずか4葉からなる、やはりリザエッディン自筆の自伝 [НА УНЦ РАН, ф. 7, оп. 1, д. 10 (с. а.): л. 564-567] も参考にした。ちなみに当該文書館には、リザエッディンがソ連期に書き遺した多量の手稿が保存されている。その概要については Булгаков 2008 を見よ。また、オレンブルグ・ムスリム宗務協議会での資格審査試験やイマームの任命等にかかわる制度については、後述する。

13) リザエッディンの姉が上述のギルマン・ケリミーと結婚しており、ファーティフはその息子である。ファーティフ・ケリミーは印刷出版のカーリーモフ・フサイノフ社を経営し、新聞『ワクト（Waqt）』（オレンブルグ、1906～1917）を発行して主筆も務めたことで知られるが、その事業の基礎となる印刷業を開始したのは彼の父ギルマンであった。

14) 執筆時期は、以下のような史料の内容から推定可能である。すなわち、リザエッディンはこれを既製の方眼ノートを利用して書いたが、このノートは右から捲ると、まずファーティフ・ケリミー宛の短い手紙が現われる。その日付はヒジュラ暦1323年ラジャブ月27日であり、露暦に換算すれば1905年9月14日である。それを捲ると「伝記（tarjuma-i hāl）」と表題を付けられた、表裏1葉に収まる、履歴書のように簡略な情報のみを記した短い自伝が現われる。さらにそれを捲ると、「自伝（tarjumam）」という表題と、著者名や韻文が記された表紙風の頁が現われる。こままではヨーロッパ式のペン（おそらく驚ペン）により、書体は強いていえばナスフに近いスタ

の史料は、1905年革命でテュルク系ムスリム知識人らによる新聞や雑誌が急増し、こうした定期刊行物上で伝統的なマドラサがより厳しい批判の対象となる以前に執筆されたものである。従ってこれが、例えば1917年の革命後に執筆されたВалидов 1923等と比較して、伝統的なマドラサの状況をより実態に則して伝えるものであることは疑いない¹⁵⁾。

このリザエッディンの自伝は、彼が他の人物にわざわざ書き送ったものであるため、史料として利用するには、その執筆意図を確認しておく必要がある。彼は、この自伝に付したファーティフ・ケリミー宛の手紙に、次のように記している。

あなたがお書きになった著作と、そして進めておられる仕事およびご尽力に対し、お返しとなるものを贈りたく思いました。あれを送り申し上げてよいか、これを送付申し上げてもよいか、と考えていた折、「私が自伝を書いて送り申し上げれば、どうだろう」と急に思いつきました。[НА РТ, ф. 1370, оп. 1, д. 27: л. 31 6]

すなわちこの自伝は、リザエッディンがファーティフ・ケリミーに対し謝意を示すという口実で書き送ったものである。実はケリミーは、この時すでに印刷所を経営していた。それゆえリザエッディンがこれを、適切な機会に公刊するつもりで書いた可能性も否定できない。しかし今のところ史料から確実に読み取れるのは、リザエッディンがケリミーへの贈りものとする意図でこれを執筆したということのみである。

この自伝については、公刊史料集 [Мәрданов и др. (ред.) 1999] のなかに、その現代タタール語訳とロシア語訳が存在する。しかしこれらの翻訳には若干の編集が注釈なく加えられており、誤りも散見される。さらに現代タタール語訳は、原文のキリル文字転写とも現代タタール語訳ともつかない文章であり、結果的にロシア語訳ともども適切さを欠くものとなっている¹⁶⁾。いずれにせよ本稿は情報の正確を期すため、НА РТ, ф. 1370, оп. 1, д. 27の原文に依拠する。

14) イルで書かれる。その表紙風の頁を捲ると、やはりヨーロッパ式のペン（ただし金属ペンと考えられる）により、しかしそれまでとは異なる、ナスフの活字体に非常に近い書体で書かれた、「序言」から始まる本文が現われる。リザエッディンはこの「序言」を、「この火曜日、陰暦1323年ジュマダーII月7日（1905年7月26日）をもって、私の47歳が終わり、私は48歳になった」という文章で書き始める。つまり彼は、まずノートの最初の数頁を空けて本文を書き始め、本文を書き終えた後に冒頭の手紙や「伝記」、および表紙風の頁を書いたのであり、従って執筆時期は1905年7月末から9月前半と推定できる。

15) ただしガスプリンスキーの新方式教育構想を支持するリザエッディンは、この自伝のなかで当然、自らが経験したマドラサ教育に批判的な見解を述べている。

16) 従って筆者は、公刊されたものを利用する場合は、Мәрданов и др. (ред.) 1999所収の現代語訳よりも、近年刊行されたキリル文字転写版であるРизаэтдин 2009を参照すべきと考える。

II リザエッディンが経験したマドラサ教育

1 書物

リザエッディンは上述の自伝のなかに「私が読んだ書物」という章を設け、自らがマドラサ生活において読み、学習に利用した書物の名称を列挙している。以下に、その一部を訳出する。

私が最初に読んだ書物は、私の記憶に残っているところによれば、カザン市で出版された *Faḍā'il al-shuhūr* という題名の作品である。[中略]

これ以前に、私は当然、*Alifbā*, *Haftiyak ijigī* と *Haftiyak sūrasī*, *Ba-dawām*, *Taqiy 'ajab*, *Ākhir zamān* という書物を読んでいた。なぜなら我々の家にいる、学ぶべき子どもらには、我々のアブスタイラがこのようにして、これらの書物により授業を行なっていたからである。

私は *Faḍā'il al-shuhūr* の後に、*Muhimmat al-muslimin*, *Qirḡ ḥadīth*, *Shurūḥ al-ṣalāt* の書物を読んだ。チストポリ市では義兄のもとで、*Yak hikāyat*, *Ḥamd-i bi-ḥadd*, *Ṣafwat al-manqūlāt*, *Amālī*, *Ta'lim al-muta'allim* の書物を読了した。

私はトゥベン・シェルチェレ (Tübān shalchali)¹⁷⁾ に行くと、*Sawāniḥ*, *Ayyuhā al-walad*, *Bidāyat al-hidāya*¹⁸⁾, *Fiqh-i akbar*, *Niṣāb al-akhbār*, *Shir'at al-islām*, *Ḥalabī*, *Kitāb al-arba'ina* を読み、諸々のマドラサの筆頭の師匠であるアブドゥルフアッターフ師による規定の授業 (nizāmī dars) として以下の書物を読んだ…… [後略] [HA PT, p. 1370, op. 1, p. 27: л. 21 6-22 a]

この文章は、リザエッディンが、マドラサで「規定の授業 (nizāmī dars)」を受け始める以前の段階で学習した書物について、述べたものである。この記述からは、彼が書物の略称を、学習した順序に従って列挙するよう努めていることが窺われる。

そこで以下に、リザエッディンの記述に依拠しつつ、彼がマドラサでいかなる書物を学習したのかを明らかにしてゆくこととする。まず、彼が「規定の授業」以前の段階で学習した書物を略称から同定し、そして学習の順序に基づいて表にしたものが、次の表 1~3 である¹⁹⁾。

17) ニージニエ・チェルシルィのテュルク (タタール) 語名である。

18) リザエッディンは最初に文章を書いた時、*Ayyuhā al-walad* と *Bidāyat al-hidāya* の書名を書き忘れたらしい。この2つの書名は欄外に書かれており、*Sawāniḥ* と *Fiqh-i akbar* の間に挿入するよう、記号で指示されている。

19) 筆者が書物の同定のために参考にした文献は GAL; СВР АН УзССР; Халидов (ред.) 1986; Фролова (ред.) 1996; Булгаков 2002; Дмитриева 2002; Гилязутдинов 2002; Сафиуллина 2003 である。同定の作業に際しては、その書物がヴォルガ・ウラル地域で普及していたと考えられるかどうかを重視した。

表1 父母のもとでの学習に利用した書物（～6 歳頃）

順序	史料にみえる書名	著者名, 書名	内 容	言語 ²⁰⁾
1	<i>Alifbā</i>	著者不明, <i>Īmān sharṭī (Sharā'it al-īmān)</i>	アラビア文字とイスラーム教義の基礎	T, P?
2	<i>Haftiyak ijigi</i> と <i>Haftiyak sūrasī</i>	編者不明, <i>Haftiyak ijigi</i> と <i>Haftiyak sūrasī</i> ²¹⁾	クルアーンの一部抜粋	A
3	<i>Ba-dawām</i>	'Abd al-Rahīm al-Bulghārī (Ūtiz Īmānī, 1754-1834), <i>Ba-dawām kitābī</i>	子ども向けの詩	T
4	<i>Taqiy 'ajab</i>	(同定困難)	表1-5の一部抜粋?	T?
5	<i>Ākhir zamān</i>	Sulaymān Bāqirghānī (Hakīm āta, d. 1186), <i>Ākhir zamān kitābī</i>	最後の審判を題材とする詩	T
6	<i>Faḍā'il al-shuhūr</i>	Jamāl al-Dīn b. Bīk(t)āsh (d. 1873) ²²⁾ , <i>Faḍā'il al-shuhūr</i>	イスラーム教義の基礎	A, T
7	<i>Muhimmat al-muslimin</i>	著者不明, <i>Muhimmat al-muslimin</i> ²³⁾	イスラーム教義の基礎, 問答体	A, P
8	<i>Qirāq ḥadīth</i>	編者不明, <i>Qirāq ḥadīth</i>	ハディース集 (『40のハディース』)	A, T?
9	<i>Shurūṭ al-ṣalāt</i>	著者不明, <i>Shurūṭ al-ṣalāt</i>	礼拝の解説	A

表2 チストボリのマドラサにおいて義兄のもとで初等の学習に利用した書物（8～9 歳頃）

順序	史料にみえる書名	著者名, 書名	内 容	言語
1	<i>Yak hikāyat</i>	著者不明, <i>Yak hikāyat</i>	預言者ムハンマドを題材とする物語, 韻文	P
2	<i>Hamd-i bi-ḥadd</i>	(同定困難)		
3	<i>Ṣafwat al-manqūlāt</i>	Йумачиков Мулкай ²⁴⁾ , <i>Ṣafwat al-manqūlāt</i>	イスラーム教義の基礎	A
4	<i>Amālī</i>	Abū 'Alī Ismā'il b. al-Qāsim al-Qālī (901-967), <i>al-Amālī (al-Nawādir)</i> ?	散文集, 教養 (adab), 行為規範?	A?
5	<i>Ta'lim al-muta'allim</i>	Burhān al-Dīn al-Zarnūjī (d. 1223?), <i>Ta'lim al-muta'allim tarīq al-ta'allum</i>	マドラサ学生の教養 (adab), 行為規範	A

20) 言語欄の記号は, A がアラビア語, P がペルシア語, T がテュルク, トルコ語 (ヴォルガ・ウラル地域に特徴的な語彙を含むものか, トルキスタンのいわゆるチャガタイ語か, あるいはオスマン語かを問わない) を指す。

21) *Haftiyak ijigi* は, 表題を直訳すれば『7分の1の音節』となるが, クルアーンの一部を抜粋しまとめた書物である。しばしばクルアーンから全体の7分の1にあたる分量を抜粋したものであると説明されるが, 実際には7分の1ではなく, 開扉章や, 台座の節と呼ばれる牝牛章 255 節, ヤー・スィーン章等の暗記すべき章節を収録する。ヴォルガ・ウラル地域で非常に普及した書物である [Сафиуллина 2003: 64-65]。

22) この人物は, カザン県ママドイシュ郡シャドチ村 (現タタルスタン共和国ママドイシュ地区) のイマームであったウラマーである [Riḍā' al-Dīn 1908: 549-553]。

23) 中央ユーラシアのスナナ派イスラーム世界で, ペルシア語が使用された地域に広く普及した書物であるが, 時代や場所等により内容に大幅な異同が認められる [濱田 2010]。

24) Сафиуллина 2003: 99-100 によれば, 西シベリアのトボリスク県ヤルトロフスク管区 (現ロシア連邦テュメニ州ヤルトロフスク地区) 出身の人物である。あるいは, リザエッディンのいう *Ṣafwat al-manqūlāt* とは, Shams al-Dīn Aḥmad b. Sulaymān b. Kamāl Pāshā (d. 1533) 著 *Ṣafwat al-manqūlāt fī sharḥ Shurūṭ al-ṣalāt* かもしれない。

表3 ニージニエ・チェルシルイのマドラサで初等の学習に利用した書物（7～10歳頃？）

順序	史料にみえる書名	著者名、書名	内 容	言語
1	<i>Sawānih</i>	Bahā' al-Dīn Muḥammad b. Husayn al-Āmili (Bahā'i, 1547-1621), <i>Kitāb sawānih safar al-Hijāz fī taraqqī ilā al-ḥaqīqa min al-majāz (Nān wa ḥalwā)</i>	イスラーム神秘主義マスナヴィー詩	A, P
2	<i>Ayyuhā al-walad</i>	Abū Ḥamid Muḥammad b. Muḥammad al-Ṭūsī al-Ghazālī (1058-1111), <i>Ayyuhā al-walad</i>	マドラサ学生の行為規範	A
3	<i>Bidāyat al-hidāya</i>	Abū Ḥamid Muḥammad b. Muḥammad al-Ṭūsī al-Ghazālī, <i>Bidāyat al-hidāya</i>	イスラーム教義の基礎, 行為規範	A
4	<i>Fiqh-i akbar</i>	Abū Ḥanīfa al-Nu'mān b. Thābit (699?-767), <i>Fiqh al-akbar</i> , あるいはその注釈書	イスラーム法学	A
5	<i>Niṣāb al-akhbār</i>	Sirāj al-Dīn b. 'Uthmān al-Ūshī al-Farghānī (12c), <i>Niṣāb al-akhbār li-tadhkirat al-akhyār</i>	預言者ムハンマドの言行, 行為規範	A
6	<i>Shir'at al-islām</i>	Muḥammad b. Abū Bakr al-Muftī al-Bukhārā'i (Imām zāda, d. 1177), <i>Kitāb shir'at al-islām ilā dār al-islām</i>	行為規範	A
7	<i>Halabī</i>	Burhān al-Dīn Ibrāhīm b. Muḥammad al-Ḥalabī (d. 1549), <i>Ḥalabī kabīr (Ghunyat al-mutamallī)</i> , あるいは <i>Ḥalabī ṣaghīr</i>	礼拝の解説, Sadīd al-Dīn al-Kāshgharī (13c) 著 <i>Munyat al-muṣallī</i> に対する注釈	A
8	<i>Kitāb al-arba'ina</i>	Muḥyi al-Dīn Abū Zakariyā' Yaḥyā b. Sharaf al-Nawawī (1233-1277), <i>Kitāb al-arba'ina ḥadīthan</i>	ハディース集 (【40のハディースの書】)	A

さて、先に引用した文章に続けてリザエッディンは、「諸々のマドラサの筆頭の師匠であるアブドゥルフアッターフ師による規定の授業」において学習した書物を列挙する〔HA PT, φ. 1370, оп. 1, д. 27 : л. 21 6〕。それらを同様に書物の略称から同定し、学習順序に従って整理したものが、次の表4である。

表4 マドラサの師匠のもとでの「規定の授業」（10歳頃～？）において学習した書物

順序	史料にみえる書名	著者名、書名	内 容	言語
1	<i>Ba-dān</i>	著者不明 (Bahā' al-Dīn al-Āmili?), <i>Ba-dān</i>	アラビア語文法学	A, P
2	<i>Sharḥ-i 'Abd Allāh</i>	'Abd Allāh b. Āq Muḥammad, <i>Sharḥ-i 'Abd Allāh</i>	アラビア語文法学, 著者不明のアラビア語文法書 <i>Mu'izzī</i> に対する注釈書	A, P
3	<i>Qawā'id</i>	著者不明, <i>Qawā'id al-i'rāb</i>	アラビア語文法学	A
4	<i>'Awāmil</i>	'Abd al-Qāhir b. 'Abd al-Rahmān al-Jurjānī (d. 1078), <i>Kitāb al-'awāmil al-mi'a</i>	アラビア語文法学	A
5	<i>Numūdhaj</i>	Abū al-Qāsim Maḥmūd b. 'Umar al-Zamakhsharī (1075-1144), <i>Kitāb al-unmūdhaj fī al-nahw</i>	アラビア語文法学	A

6	' <i>Ayn al-'ilm</i>	Jamāl al-Dīn Muḥammad b. 'Uthmān al-Balkhī (14c), <i>Kitāb 'ayn al-'ilm wa zayn al-ḥilm</i>	行為規範, Abū Hāmid al-Ghazālī 著 <i>Iḥyā' ulūm al-dīn</i> 等からの抜粋	A
7	<i>Kāfiya</i>	Jamāl al-Dīn Abū 'Amr 'Uthmān b. 'Umar b. al-Ḥājjib (d. 1249), <i>al-Kāfiya fī naḥw</i>	アラビア語文法	A
8	<i>Īsāghūji</i>	Athīr al-Dīn b. Mufaḍḍal b. 'Umar al-Abhari (d. 1264), <i>Kitāb al-īsāghūji</i>	論理学, ボルビュリオス『イサゴゲー』をもとにした論理学書	A
9	<i>Shamsiya</i>	Najm al-Dīn 'Alī b. 'Umar al-Qazwīnī al-Kātībī (d. 1276), <i>al-Rīsāla al-shamsiya fī al-qawā'id al-mantiqiya</i>	論理学	A
10	<i>Zubdat al-asrār</i>	Shams al-Dīn Abū al-Thana' Ahmad b. Muḥammad Abū al-Barakāt al-Zīlī al-Siwāsī (d. 1600), <i>Zubdat al-asrār fī sharḥ Mukhtaṣar al-Manār li-l-Nasafī</i>	法学基礎理論 (uṣūl al-fiqh). Hāfiy al-Dīn Abū al-Barakāt 'Abd Allāh al-Nasafī (d. 1310) 著 <i>al-Manār al-anwār fī uṣūl al-fiqh</i> に対する孫注釈	A
11	<i>Talkhiṣ al-Miftāḥ</i>	Jamāl al-Dīn 'Abd Allāh Muḥammad b. 'Abd al-Raḥmān al-Qazwīnī Khaṭīb Dimashq (1268-1338), <i>Talkhiṣ al-Miftāḥ</i>	修辭学, Sirāj al-Dīn Abū Ya'qūb Yūsuf b. Abū Bakr al-Sakkākī (d. 1229) 著 <i>Miftāḥ al-'ulūm</i> の摘要	A
12	<i>Sharḥ-i 'Aqā'id al-Taftāzānī</i>	Sa'd al-Dīn Mas'ūd b. 'Umar al-Taftāzānī (1322-1390), <i>Sharḥ al-Taftāzānī li-l-'Aqā'id al-nasafiya</i>	神学, Najm al-Dīn Abū Ḥafs 'Umar al-Nasafī (1068-1142) 著 <i>al-'Aqā'id</i> に対する注釈	A
13	<i>Hāshiya-i Khayālī</i>	Aḥmad b. Mūsā al-Khayālī (15c), <i>Hāshiyat al-Khayālī 'alā al-Sharḥ al-'Aqā'id</i>	神学, 表 4-12 に対する注釈	A
14	<i>Hāshiya-i Siyālkūti</i>	'Abd al-Ḥakīm b. Shams al-Dīn al-Siyālkūti (al-Salikūti, d. 1657), <i>Hāshiya 'alā Hāshiyat al-Khayālī 'alā Sharḥ al-Taftāzānī li-l-'Aqā'id al-nasafiya</i> (<i>Zubdat al-afkār</i> , 'Abd al-Ḥakīm)	神学, 表 4-13 に対する注釈	A
15	<i>Tawḍīḥ</i>	Sadr al-Sharī'a al-Thānī 'Ubayd Allāh b. Mas'ūd b. Tāj al-Sharī'a Maḥmūd b. Sadr al-Sharī'a al-Awwal Aḥmad al-Maḥbūbī (d. 1346), <i>Tawḍīḥ fī ḥall ghawāmiḍ al-Tanqīḥ</i>	法学基礎理論, 同著者 Sadr al-Sharī'a al-Thānī 'Ubayd Allāh b. Mas'ūd al-Maḥbūbī が自らの法学基礎理論書 <i>Tanqīḥ al-uṣūl</i> に対して著した注釈書	A
16	<i>Talwīḥ</i>	Sa'd al-Dīn Mas'ūd b. 'Umar al-Taftāzānī, <i>al-Talwīḥ fī sharḥ al-Tawḍīḥ (al-Talwīḥ fī kashf ḥaqā'iq al-Tanqīḥ)</i>	法学基礎理論, 表 4-15 に対する注釈	A
17	<i>Sharḥ-i 'Aqā'id al-Dawwānī</i>	Jalāl al-Dīn Muḥammad b. As'ad al-Dawwānī (1427-1502), <i>Sharḥ al-'Aqā'id al-aḍudiya</i>	神学, 'Aḍud al-Dīn 'Abd al-Raḥmān b. Rukn al-Dīn al-Bakrī al-Shabānkārī al-'Ijī (1281-1356) 著 <i>al-'Aqā'id al-aḍudiya</i> に対する注釈	A

またリザエッディンは、マドラサの師匠のもとでの「規定の授業」を理解するために自らが利用した書物の略称も列挙している [HA PT, φ. 1370, on. 1, p. 27: л. 21 б]。それらは当然ながら表 4 にみられる諸々の書物の注釈書であるが、これをまとめたものが、次の表 5 である。

表 5 マドラサの師匠のもとでの「規定の授業」のために自ら利用した書物

順序	史料にみえる記述	著者名, 書名	内 容	言語
1	<i>Sharḥ-i Jāmi</i>	'Abd al-Raḥmān b. Aḥmad al-Jāmi (Mullā Jāmi, d. 1492), <i>al-Fawā'id al-dīyā'iya</i> (<i>Mullā Jāmi 'alā al-Kāfiya</i>)	アラビア語文法学, 表 4-7 に対する注釈	A

2	<i>Īsāghūjī</i> のための <i>Hāshīya-i Šādiq</i>	Mullā Šādiq (16c) 著?, <i>Hāshīya-i Maulawī Šādiq 'alā Sharḥ al-Īsāghūjī (Kitāb Mullā Šādiq)</i>	論理学, 表 4-8 に対する孫注釈	A
3	<i>Shamsīya</i> のための <i>Sayyid ḥāshīyāsī</i>	'Alī b. Muḥammad al-Jurjānī al-Sayyid al-Sharīf (d. 1413), <i>Sharḥ sharḥ al-Risāla al-shamsīya (al-Kūchak)</i>	論理学, 表 4-9 に対する孫注釈	A
4	<i>Sharḥ-i Dawwānī</i> のための <i>Ismā'il al-Kalanbawī ḥāshīyāsī</i>	Ismā'il b. Muṣṭafā al-Kalanbawī (Gelenbevi, d. 1790), <i>Hāshīya bi-Sharḥ al-'Aqā'id al-aḍudīya</i>	神学, 表 4-17 に対する注釈	A

ところで、これまで表にまとめた書物の他に、リザエッディンは彼自身がマドラサで独学した書物、および他の学生らとともに学習した書物も挙げている [HA PT, φ. 1370, on. 1, n. 27: n. 21]。すなわちそれらは、彼が「規定の授業」の枠外で自主的に学習した書物ということになる。次の表 6 は、これをまとめたものである。

表 6 マドラサで独学 (1~6)、あるいは他の学生らと自主学習 (7, 8) した書物

順序	史料にみえる記述	著者名, 書名	内 容	言語
1	<i>Sharḥ-i Hikmat al-'ayn</i>	Mirak Shams al-Dīn Muḥammad b. Mubārak Shāh al-Bukhārī (14c), <i>Sharḥ Hikmat al-'ayn</i>	論理学 (哲学), Najm al-Dīn 'Alī b. 'Umar al-Qazwīnī al-Kātibī 著 <i>Kitāb hikmat al-'ayn</i> に対する注釈	A
2	<i>Sharḥ-i Mawāqif</i>	'Alī b. Muḥammad al-Jurjānī al-Sayyid al-Sharīf, <i>Sharḥ-i Mawāqif fi 'ilm al-kalām</i>	神学, 'Aḍud al-Dīn 'Abd al-Raḥmān b. Rukn al-Dīn al-Bakrī al-Shabānkārī al-Ījī 著 <i>Kitāb al-mawāqif fi 'ilm al-kalām</i> に対する注釈	A
3	<i>Tafsīr-i Bayḍāwī</i>	Naṣīr al-Dīn Abū al-Khayr 'Abd Allāh b. 'Umar al-Bayḍāwī (d. 1286?), <i>Anwār al-tanzīl wa asrār al-ta'wīl</i>	タフスィール (クルアーン注釈) 学	A
4	<i>Mirqāt al-wuṣūl</i>	Muḥammad b. Farāmurz b. 'Alī Mullā Khusraw (d. 1480), <i>Mirqāt al-wuṣūl ilā (fi?) 'ilm al-uṣūl</i>	法学基礎理論	A
5	<i>Mir'āt al-uṣūl</i>	Muḥammad b. Farāmurz b. 'Alī Mullā Khusraw, <i>Mir'āt al-uṣūl</i>	法学基礎理論, 同著者が自らの法学基礎理論書である表 6-4 に対して著した注釈書	A
6	(表 6-4, 6-5 に対する注釈である) <i>Izmīrī</i> によるもの	al-Izmīrī (d. 1690), <i>Mir'āt al-uṣūl</i>	法学基礎理論, 表 6-5 に対する注釈	A
7	<i>Sullam</i>	Muḥibb Allāh b. 'Abd al-Shukūr al-Bihārī (d. 1707), <i>Sullam al-'ulūm</i>	論理学	A
8	<i>Qāḍī Mubārak ḥāshīyāsī</i>	Muḥammad Mubārak b. Muḥammad Dā'im Adhamī Fārūqī (Qāḍī Mubārak, d. 1748), <i>al-Munhiya</i>	論理学, 表 6-7 に対する注釈	A

リザエッディンが「私が読んだ書物」の章に列挙する書物は、以上のようなものである。だが彼は、さらに「私が筆写した書物」という章を別に設け、自らがマドラサで筆写した書物の略称も列挙している [HA PT, φ. 1370, on. 1, n. 27: n. 20 6]。それらは、上述の諸々の

書物と重複するものも含むが、彼が列挙する順序に従って表1~6と同様に整理すれば、次の表7のようになる。

表7 マドラサで筆写した書物

順序	史料にみえる記述	著者名、書名	内容	言語
1	<i>Ba-dān</i>	(表4-1)		
2	<i>Sharḥ-i 'Abd Allāh</i>	(表4-2)		
3	<i>Qawā'id</i>	(表4-3)		
4	<i>'Awāmil</i>	(表4-4)		
5	<i>Manṣūr ḥāshiyāsī</i>	(同定困難)		
6	<i>Kāfiya</i>	(表4-7)		
7	<i>Sharḥ-i Jamī</i>	(表5-1)		
8	<i>Zubdat al-asrār</i>	(表4-10)		
9	<i>Khayālī ḥāshiyāsī</i> に対する <i>Siyālkūti ḥāshiyāsī</i>	(表4-14)		
10	<i>Ṣādiq</i>	(表5-2)		
11	<i>Qaṣīda-i munfarīja sharḥī</i>	(同定困難) ²⁵⁾		
12	<i>Ta'lim al-muta'allim tariq al-ta'allum</i>	(表2-5)		
13	<i>Muqaddima-i jazariya</i>	Shams al-Dīn Abū al-Khayr Muḥammad b. Muḥammad al-Jazari (d. 1429), <i>al-Muqaddima al-jazariya fī al-tajwid</i>	タジュウイード (クルアーン読誦) 学	A
14	Khālid al-Azharī による, <i>Muqaddima-i jazariya</i> に対する注釈	Zayn al-Dīn Khālid b. 'Alī b. Abū Bakr al-Azharī (d. 1499), <i>Sharḥ al-Muqaddima al-jazariya</i>	タジュウイード学, 表7-13に対する注釈	A
15	<i>Rujūzat al-Suyūṭī</i>	Jalāl al-Dīn Abū al-Faḍl 'Abd al-Raḥmān b. Abū Bakr al-Khuḍayrī al-Suyūṭī (1445-1505), <i>al-Tathbīt fī 'ilm 'inda al-tabyīt (Urjūza fī su'āl al-mal'akayn fī al-qabr)</i>	ハディース学 (ラジャズ詩型)	A
16	<i>'Ayn al-'ilm</i>	(表4-6)		
17	<i>Mukhtaṣar al-Wiqāya</i>	Sadr al-Sharī'a al-Thānī 'Ubayd Allāh b. Mas'ūd al-Maḥbūbī, <i>al-Nuqāya Mukhtaṣar al-Wiqāya</i>	法学, Tāj al-Sharī'a Maḥmūd b. Ṣadr al-Sharī'a al-Awwal Aḥmad al-Maḥbūbī (13c) 著 <i>Wiqāyat al-riwāya fī masā'il al-Hidāya</i> ²⁶⁾ の摘要	A

1860年代後半から1880年代末頃のヴォルガ・ウラル地域における伝統的なマドラサで、リザエッディンが所定の順序に基づき学習した諸々の書物は、ほぼ以上のようなものである。

25) *al-Qaṣīda al-munfarīja* という表題の書物は、Abū Ḥamid al-Ghazālī による著作と、11~12世紀の著者 Abū al-Faḍl Yūsuf b. Muḥammad b. al-Naḥwī al-Tawzarī によるものの2つが知られる [GAL GI: 268-269; 426]。リザエッディンが書写したものは、これらのいずれかに対する注釈書と考えられるが、現在のところ同定不可能である。

26) この *al-Wiqāya* は、中央ユーラシアや南アジアの広範な地域で権威ある書物として利用されたハナフィー派法学書である、マルギーナーニー (Burhān al-Dīn Abū al-Ḥasan 'Alī b. Abū Bakr al-Marghinānī, 1117~1197) 著『ヒダーヤ (al-Hidāya)』の摘要である。

彼は上述の自伝において、これらの他にもいくつかの書物の略称を記録するが、少なくとも彼がマドラサで学習した書物として意識的に列挙するのは、上述の表1~7にみられるとおりである。

これらの書物は、ほとんどが11世紀から17、18世紀頃までの間に著された古典文献である。リザエッディンが実際に利用した手写本が比較的新しい時代に作成されたものとしても、その書物のテキスト自体は、彼が生きた時代よりもはるか以前にその学問的権威が確立したもののばかりであったと言える。そしてまた、これらの書物の著者の出身・活動地域が、ヴォルガ・ウラル地域ではないことにも留意する必要がある。これらのうち、ヴォルガ・ウラル地域（あるいは西シベリア等の、ロシア帝国領内）の出身であったり、そこで活動したりしていた人物による著作であることが確実なものは少なくとも表1-3と1-6の2点、そしてその可能性の高いものは表2-3であり、あわせて3点のみである。また、これらの書物の圧倒的多数がアラビア語文献であり、テュルク語やペルシア語のそれは教授・学習段階の初期において補助的に用いられるのみであったと考えられることにも、注意を払う必要がある。こうした諸々の事実は、当該時代地域のマドラサで利用された書物と、それにより構成された教育課程の由来に深く関係するのだが、この問題については本稿の末尾で触れることとする。次に、主に本節で明らかになった事実に基づき、リザエッディンが経験したマドラサ教育課程について整理する。

2 教育課程

リザエッディンが経験したマドラサ教育は、「規定の授業 (niḡāmī dars)」以前と、「規定の授業」との2つの段階に大別される。前者は、彼が幼い年齢のうちに、自らの母親を含むアブスタイラであるとか、または父親や義兄、その他の教師のもとで受けた教育である。一方、後者は、彼が10歳を過ぎて以降、「規定の授業」として受けた教育である。本稿では、前者をマドラサにおける初等程度の教育、後者の「規定の授業」を高等程度の課程とし、各段階における教育内容を整理して示すこととする²⁷⁾。

上述の表1~3に基づけば、マドラサにおける初等程度の教育ではおよそ、(1) クルアーンやその一部の抜粋からなる書物を利用したクルアーン暗唱、(2) アラビア文字とイスラーム教義の基礎知識、(3) イスラーム神秘主義の要素を含むような韻文、(4) アダブと呼ばれる教養や行為規範、そして(5) ハディースが教えられたことが判明する。初等の教授・学習段階の課程構成は、(1) や (2) が最初期から継続的に教えられると同時に、(3) が比較的若い年齢あるいは早い段階で、(4) や (5) が比較的遅い段階で教授されるというものであった。

27) 後述するВалидов 1923; Коблов 1916 の記述や、ほぼ同時期のトルキスタンのマドラサ教育課程が『汝知れ』、すなわち *Ba-dān* (表4-1) の学習より始まるものであったことを踏まえれば [磯貝 2009: 107-108]、本稿における初等と高等の区分は妥当とみなされよう。

特筆すべきは、リザエッティンの最初期の学習が、アブスタイであった母親の指導のもとで行なわれていたことである。そのことは、先に引用した文章の「……子どもらには、我々のアブスタイらが……これらの書物により授業を行なっていた……」[HA PT, ф. 1370, оп. 1, д. 27: л. 21 6] という部分からも推定可能であるが、実はリザエッティンは、自らの代表作の1つである『事跡 (Āthār)』のなかで、Jamāl al-Dīn b. Bik(t)āsh 著 *Faḍā'il al-shuhūr* (表 1-6) について解説しつつ、はっきりと次のように述べている。

私が幼い頃、学び始めてから読んだ書物のうちで、記憶に残っている最初のもので、この *Faḍā'il al-shuhūr* の本である。今日のこのように覚えているが、私は最初の授業を、私の最愛の母から受けたのであった。[Ridā' al-Dīn 1908: 553]

以上からすれば、表 1 の書物 9 点のうち少なくとも 1~6 は、アブスタイである女性らが子どもの教育に利用していたとみてよい²⁸⁾。

初等程度の教育を、教授・学習に利用された書物の記述言語からみれば、クルアーンやハディースの原文を除外すると、教育段階の最初期にはテュルク語で書かれた本が使われたが、その後すぐにペルシア語、そしてアラビア語で書かれた書物が使用されるようになったことが明らかである。リザエッティンは、表 2 以降にみられるとおり、自宅から離れたマドラサで学習し始めた 7 歳頃より後は、母語であるテュルク語で書かれた書物を学習に利用しなかった。

ところで、高等程度の教育課程に相当するマドラサの「規定の授業」について、上述の表 4~7 に含まれる情報を整理すれば、以下ようになる。規定の授業の教育課程は基本的に、ある学問分野の諸々の書物を順に教授・学習してゆき、それを終えると次に学ぶべき学問分野の書物をまた順序に従い教授・学習してゆくという方法によったと考えられる。学問分野の教授・学習の順序は、原則としてアラビア語文法学、論理学、神学、法学基礎理論 (*uṣūl al-fiqh*) の順であったことが、表 4 から判明する。それぞれの学問分野において書物は、表 4 の 12~14, 15~16 に顕著なように、原典と注疏の組み合わせに基づき教授・学習された。史料にみえる書名が注釈書の場合、それは書物の本文が原典、本文欄外が注疏という形式で書かれていたはずであり、リザエッティンは注釈書が手もとにあれば注釈のみならず、その原典にも目を通しただろう。また表 5 からは、彼が規定の授業を理解するために、規定の授業で使用された書物に対する注釈書を、独自に研究していたことがわかる。

高等程度の教授・学習段階にあつて、しかし規定の授業の枠外で、リザエッティンは独学により、あるいは他の学生らとともに自主的に、表 6 にみられる諸々の書物を学習した。また表 7 にみられるように、彼は規定の授業の内外で学習した書物の多くを筆写した。彼は、筆写したものが紙やインクの質等の問題で痛んだ場合は、2 度、3 度と書直し直したと証言

28) ヴォルガ・ウラル地域で女性がイスラームの基礎知識を広め伝える役割を果たしたことについては、Kefeli 1997a; 1997b; 2001 を参照。

する [HA PT, ф. 1370, оп. 1, д. 27: л. 20 б]。こうして独学したり、独自に筆写したりした書物のなかには法学書 *Mukhtaṣar al-Wiqāya* (表 7-17) が含まれており、タフスィール (クルアーン注釈) 学 (表 6-3)、タジュウイード (クルアーン読誦) 学 (表 7-13, 7-14)、ハディース学 (表 7-15) といった学問分野の専門文献もみられる。すなわち、リザエッディンが修学したマドラサでは、学生が規定の授業の枠外で様々な自主学習することが可能であったと言える。

また、高等程度の教育を書物の記述言語からみれば、最初のアラビア語文法学文献 2 点 (表 4-1, 4-2) でペルシア語が用いられる以外は、すべてアラビア語によるものであったことが明らかである。このことに関連して、テュルク語やペルシア語で書かれた「あんちょこ」が存在した可能性も否定できないが²⁹⁾、少なくともリザエッディンは、そうしたものについて何も記録していない。

ところでリザエッディンは、いかにして書物を入手したのだろうか。ほとんどの書物はマドラサに備えられていたと考えられる。ただ彼には、義兄ギルマーンが巡礼の旅から——カイロや、おそらくはイスタンブルから——持ち帰った書物や定期刊行物を読む機会もあった [HA PT, ф. 1370, оп. 1, д. 27: л. 18 a, 19 a]。そして彼は書物を筆写し、自ら所有するものとしたが、その際に口頭で読誦された文章を耳で聴いて書き取るという方法をとることもあった [HA PT, ф. 1370, оп. 1, д. 27: л. 20 a]。

3 師弟関係と教授方法

リザエッディンは自伝のなかで「私の師匠」という章を設け、マドラサにおいて自らの師であった人々の名前を挙げる。それによれば彼の師匠は、父母と義兄ギルマーンの他、Ḥusayn b. Muḥyi al-Dīn al-Māqṭamawī, Muḥammad Ḥanif b. 'Abd al-Qayyūm al-Shalchalī, 'Abd al-Fattāḥ b. 'Abd al-Qayyūm al-Shalchalī, Muḥammad b. 'Ubayd Allāh al-Kizlawī, Sayyid 'Alī al-Zāhir al-Watarī の 5 名であった。このうち彼が最も長い期間にわたり教えを受けた師匠は、ニージニエ・チェルシルイ村のマドラサでの「規定の授業」のアブドゥルファッターフ師 (すなわち上述の 'Abd al-Fattāḥ b. 'Abd al-Qayyūm al-Shalchalī) であった [HA PT, ф. 1370, оп. 1, д. 27: л. 20 б-21 a]。このようにリザエッディンが師匠の名前をわざわざ記録したことは、誰が師匠であるのかが重要な事柄とみなされていたことを意味しよう。

さて、こうした師弟の間での教授方法についても、リザエッディンは次のように自伝に記す。

29) テュルク語やペルシア語の「あんちょこ」の存否については、『ロシア科学アカデミー東洋学研究所蔵テュルク語写本カタログ』[Дмитриева 2002] やタタルスタン共和国科学アカデミー言語文学芸術研究所蔵のペルシア語写本の目録 [Гилязутдинов 2002] 等から、ある程度想像することができる。

今日までのマドラサにおける規定 (nizām) であれば、シャーキルドが *Kāfiya* を持って座ると、師匠の方は *Kāfiya* の授業をするのに *Mullā Jāmī* をすべて自ら読み、それについて *‘Iṣām*, *‘Abd al-Ghafūr*, *‘Abd al-Ḥakīm*, *‘Iṣmat Allāh* のようなものに収録される議論や答えを口述したものである。そして *Mukhtaṣar* を学ぶシャーキルドに対し、師匠は *Quhistānī* を持ち、[アラビア語の]「曰く (qāla)」、[また一説には (qila)」、[これに関して (fi-hi)] という暗号を1つも残さず、謎かけにいたるまで読んだものだった³⁰⁾。[HA PT, φ. 1370, on. 1, d. 27: п. 11 6-12 a]

この記述によれば、教師と学生が向かいあい、アラビア語文法学書 *al-Kāfiya* について授業が行なわれる場合、学生は *al-Kāfiya* を手にするが、教師の方は *al-Kāfiya* の様々な注釈書(当然 *al-Kāfiya* 本文も収録されるものだろう)を持ち、注釈を講じていたということになる。法学書 *Mukhtaṣar al-Wiqāya* についても同様である。そして授業は、師匠が弟子に書物の内容を口述し伝えるという方法で行なわれた³¹⁾。これはマドラサの高等程度の教育を通して、学問分野や書物を問わず、実践された方法であったとみてよい。

またマドラサでは、一定程度の学識を有するとみなされた学生が他の学生に教えるという教育方法が珍しくなかった。リザエッティンは次のような経験を記録している。

私が *Sharḥ-i ‘Aqā’id* を学んでいた時のことであった。尊敬する我らの師匠が、ご自身の *‘Abd al-Rauf* という名のご息子と、ご自身の姉妹のご息を教えるようにと、私を任じてくださった。彼らの1人は *Sharḥ-i Jāmī* を、もう1人は *Numūdhaj* と *Mukhtaṣar al-Wiqāya* を学んでいた。
[HA PT: φ. 1370, on. 1, d. 27, п. 12]

すなわち、リザエッティンが *Sharḥ-i ‘Aqā’id* (表4-17) を学習していた時、つまりマドラサの規定の授業の最終段階にあった時のことである。彼は師匠から、アラビア語文法学(表4-5, 5-1の書物)を学んでいる学生らを教えるよう告げられた。そのうち1名が法学書 *Mukhtaṣar al-Wiqāya* を学習していたのは、オレンブルグ・ムスリム宗務協議会で資格審査試験を受けるためだったが、それはさておき、ある学生が他の学生を公に教える場合、それ

30) この引用文に現われる書物の詳細は以下のとおり。*Kāfiya*: 表4-7。*Mullā Jāmī*: 表5-1。*‘Iṣām*: *‘Iṣām al-Dīn Ibrāhīm b. Muḥammad al-Isfarā’īnī* (d. 1537) 著, 表5-1に対する孫注釈 *Ḥāshīyat al-Mawlawī ‘Iṣām al-Dīn ‘alā al-Jāmī*。*‘Abd al-Ghafūr*: 表5-1の著者 *‘Abd al-Rahmān al-Jāmī* の弟子であった *‘Abd al-Ghafūr al-Lārī* (d. 1506) による, 表5-1に対する注釈書 *‘Iṣmat ‘alā al-Jāmī*。*‘Abd al-Ḥakīm*: *‘Abd al-Ḥakīm b. Shams al-Dīn al-Siyālkūti* が著した, 先の *‘Abd al-Ghafūr al-Lārī* 著 *‘Iṣmat ‘alā al-Jāmī* に対する注釈。*‘Iṣmat Allāh*: *‘Iṣmat Allāh Muḥammad b. Maḥmūd al-Bukhārī* による, やはり表5-1に対する注釈書 *Ḥāshīyat al-Mawlawī ‘Iṣmat Allāh ‘alā al-Jāmī*。*Mukhtaṣar*: 表7-17。*Quhistānī*: *Shams al-Dīn Muḥammad al-Quhistānī* (al-Kūhistānī, d. 1534) による, 表7-17に対する注釈書 *Jāmī ‘al-Rumūz* を指すと考えられる。ヴォルガ・ウラル地域に普及した, アラビア語文法学書 *al-Kāfiya* の注疏について詳しくは, Сафуллина 2003: 140-144 および GAL GI: 303-305 を参照。*Quhistānī* については GAL GI: 378 を見よ。

31) 書物を筆写する際に口述された文章を耳で聴いて書き取ったり, 師匠が弟子に書物の内容を口述することで知識を伝達したりするのは, まさしくイスラームの学術伝統においてリワーヤ (riwāya) と呼ばれる方法である [Leder 1994; Pedersen & Makdisi 1985: 1130-1131]。

は師匠の指示によるものであった。このように教える立場にある学生は、すでに述べたように、ハルファと呼ばれた。またマドラサには、規定の授業を学び終えたか、あるいは優秀とみなされる、ピシュカデム (bish qadam) と呼ばれる者らがあり、リザエッディンによれば、彼らは学術的な議論を行なう会合を開いたりしていた [НА РТ, ф. 1370, оп. 1, д. 27: л. 176]。

4 寄宿学生生活

リザエッディンはイマームの家庭に生まれ育ったため、最初期の教育は自宅で母親から、あるいは自宅に近接したマドラサで教師を兼職する父親から受けたと考えられる。しかし彼は、自宅を離れて教育を受けるようになると、マドラサに寄宿して過ごした。上述のように、彼は原則として、毎年秋になると自宅からマドラサへ移って寄宿学生生活を送り、春になるとマドラサから自宅に戻っていた [НА РТ, ф. 1370, оп. 1, д. 27: л. 226-24a]。つまり1年のうちマドラサで授業が行なわれる時期は秋から春にかけてであり、主に冬季であった。

リザエッディンがマドラサ寄宿生活を開始した年齢は、7歳になる頃である。ただし最初は、兄等の年長の身内が彼に同行し、一緒に生活した。彼の両親が年長の身内なしで彼のみを寄宿させるようになったのは、1869年の秋、彼が10歳を過ぎて以降と考えられる [НА РТ, ф. 1370, оп. 1, д. 27: л. 226-24a]。

III 19世紀後半ヴォルガ・ウラル地域のマドラサ教育

1 教育課程、書物、教授方法、学生生活

ヴォルガ・ウラル地域における伝統的なマドラサ教育については、リザエッディンの自伝の他、上述のВалидов 1923、そしてカザンで活動したロシア正教宣教師ヤコヴ・コプロフ (Яков Дмитриевич Коблов, 1876~?) の1916年の著作 [Коблов 1916] からも比較的詳細な情報を得ることができる。ただ、Валидов 1923に上述のような問題があるのと同様、Коблов 1916も、より適切な史料が他に存在する場合には、一次史料として利用することができない。というのもコプロフは当然のことながらマドラサで学習した経験を持たず、さらに彼の記述には、彼自身が研究したロシア帝国の東洋学者らの著作の内容が反映されているからである。つまりコプロフの記述は結果的に、ヴォルガ・ウラル地域のムスリムについて書いたものか、マー・ワラー・アンナフルについてか、あるいは他地域にかんするものなのか判別し難い部分を含んでおり、それゆえ史料として利用するには、注意を要するものとなっている。それでもВалидов 1923やКоблов 1916がリザエッディンの記録を傍証し補完する史料として有用であることはまちがいない。要するに、Валидов 1923やКоблов 1916から得られる情報のうち、時代地域等について明記された、具体的事実を証言するものについては、リザエッディンの経験が当該時代地域において一般的なものであったか否かを判断

する材料となり得るのである。そこで以下に、これら複数の史料をあわせることにより判明する、19 世紀後半ヴォルガ・ウラル地域のマドラサ教育の一般的状況について、整理することとする。

リザエッディンが記録するマドラサ教育は、Валидов 1923 やКоблов 1916 の記述に照らすと実際のところ、当該時代地域において一般的なものであったと判断してよい。その教育課程は大きく、マクタブとも呼ばれ得る施設における初等程度の教育と、マドラサにおける高等程度のそれとの 2 段階にわかれていた。そして諸々の学問分野、書物を所定の順序に従い教授・学習するというものであった。

上述のように、初等程度の教育では、クルアーンやイスラーム教義の基礎知識、イスラーム神秘主義の要素を含む韻文、行為規範、『40 のハディース』等のハディース集が教授・学習された。高等程度の教育では、まずアラビア語文法学、次いで論理学、神学、法学基礎理論、法学の諸学問が、この順序で教授・学習された³²⁾。

リザエッディンが列挙するマドラサ教育のための書物は少なからず、ヴァリドフやコプロフが挙げるものと共通する。初等程度の書物であれば表 1-1, 1-2, 1-5, 3-8, 高等程度の教育で利用されたものとしては、アラビア語文法学で表 4-1, 4-2, 行為規範で表 4-6, 論理学で表 4-8, 6-1, また神学書では表 4-12, 4-17, 6-2 が特に普及していたようであり、クルアーン注釈でよく用いられた書物は表 6-3, タジュウィード学が学ばれる場合は表 7-13, そして法学書では表 7-17 をはじめとする、『ヒダーヤ』とその注釈や摘要が広く利用されていた [Валидов 1923: 13-14, 16, 25-32; Коблов 1916: 14-35]。教授・学習に利用された書物を記述言語からみれば、初等程度の段階ではテュルク語の本も用いられたが、高等程度の課程では、最初にペルシア語とアラビア語を併用する書物 1~2 点程度が利用されたのを除外すれば、すべてアラビア語文献であった。この点についてもリザエッディンの経験は一般的であったと言える。

こうした諸々の事実から、19 世紀後半ヴォルガ・ウラル地域における伝統的なマドラサの高等程度の教育課程は、イスラーム法学の専門家であるウラマーを養成するものであったと言えよう。

ちなみにヴァリドフによれば、学生らは、学習中の書物の名称に基づいて、「～読み（～ハーン、-khwān）」と呼ばれたという。例えばアラビア語文法学を『アブドゥッラーの注釈 (Sharḥ-i 'Abd Allāh)』で学ぶ学生らは「アブドゥッラーの注釈読み (Sharḥ-i 'Abd Allāh-khwān)」と呼ばれた [Валидов 1923: 25]。

初等の子どもらに対するアラビア文字の読みかたの教授方法についても、ヴァリドフは具

32) ヴァリドフは論理学と神学の間に哲学が教授されたと述べ [Валидов 1923: 26], コプロフも哲学に言及するが [Коблов 1916: 31-32], リザエッディンの記録では哲学が重視された様子はない。哲学がまったく学ばれなかったわけでもなくとも、やはり哲学系統の学問としては論理学が最も重要とみなされたはずである。トルキスタンの事例ではあるが、磯貝 2011: 資料 2 も参照。

体的に記述している。それは単語を音節で区切り、音節ごとに、文字の名称とそれに付される発音符号の名称、そして発音を、声に出して読みつつ暗記してゆく、イジェク (ijik) と呼ばれる方法である³³⁾。例えば「ミン (min)」という単語がある場合、子どもらは「ミームのアストゥ [「下」の意でカスラを意味する一訳注] はミ (mi), ヌーンにスクーンで、ミン」と発声して記憶した [Валидов 1923: 16-17; Коблов 1916: 36-38]。書きかたは、ハルファが子どもらに簡単な文章を書いて見せながら教えたが、それとは別に子どもらは、書物や、地域でよく知られる歌を書写して覚えたという。ちなみに書物の筆写は、印刷本がない時代には書物が手もとにないという理由で行なわれたが、印刷本の普及後も書く練習として続けられたと、ヴァリドフは述べる³⁴⁾。リザエッディンも上述のように多数の書物を筆写し、規定の授業の枠外の書物までも自主的に書写して研究した。つまり当該時代地域の伝統的なマドラサには、一定程度の自主的な学習を奨励するような学生文化があり、それを可能にするだけの蔵書も備わっていたとみることができよう。このことはマドラサが学生にとり、学ぶ意欲がある場合には、相当の学識を身につけることのできる場所であったことを意味するだろう³⁵⁾。

1年のうちマドラサで授業が行なわれた時期は、リザエッディンの記録にあるように、秋から春までであったが、コプロフによれば、これは夏の農繁期を避けるためであった [Коблов 1916: 48]。初等程度の教育を受ける男の子どもらは通例、マハッラの集会モスクに併設される学校に通学した。女子はイマームの家でアブスタイに教わった。一方、マドラサ高等教育を受ける学生は、やはりリザエッディンの記録にあるように、寄宿生活を送った [Валидов 1923: 17, 18]。学生の年齢についてヴァリドフは、初等程度のマクタブ教育を受ける者らのなかでは8~14歳の人数が多かったと述べる。その次が6~7歳である。しかし16~17歳で初等の課程にある者もおり、彼らはハルファの助手を務めたりしたという [Валидов 1923: 16]。またコプロフによれば、カザンのマドラサでは高等程度の教育に8~15年間が費やされた。学生のなかには40歳になるまで学ぶ者もおり、最も若くしてマドラサを去る場合でも22~24歳であった [Коблов 1916: 49]。学生の年齢について、ヴァリドフやコプロフの記述が事実を反映したのだとすれば、リザエッディンは比較的早い年齢のうちに、初等および高等の教育を受け始めたことになる。そしてまた、マドラサで年長の学生がハルファとして他の学生を教え、教師を補助するのも、一般的なことであった [Валидов 1923: 13; Коблов 1916: 56-57]。

33) クルアーンや、その一部を抜粋したものである *Haftiyak* (表1-2) の読みかたは、特にこの方法で教授・学習された。本稿注21も見よ。

34) Валидов 1923: 14-16を見よ。ウスマーノフはГосманов 1994: 95-155で、マドラサの学生が筆写した写本の事例を複数提示し、そこに多数の韻文が記されていることを指摘する。

35) Усмановはこのことを、早くも1980年代に指摘している [Госманов 1984: 145]。Фархатов 1994: 75-76も参照。

2 マドラサ高等教育の目的と社会的機能 —— 修学者の就職をめぐる ——

ところで本稿はこれまで、マドラサ教師についてほとんど説明をしてこなかった。そこで以下にまず、マドラサ教師がいかなる人々であったのかを、特に制度的な側面から概観する。その後、彼らが教職を務めただけでなく、教師となる人材の養成課程でもあった、マドラサにおける高等教育について、修学者が就職のために受験した資格審査試験にかかわる史料を検討することで、その目的や社会的機能を考察することとする。

すでに述べたように³⁶⁾、19世紀後半のロシア帝国ヴォルガ・ウラル地域においてムスリム行政を担当していた機関は、ウファ市所在のオレンブルグ・ムスリム宗務協議会である。その業務の1つに、マハッラのイマーム職等を志望する者らに対する資格審査試験の実施があった。リザエッディンは28歳でこれを受験し、イマーム・ハティーブとムダッリスの資格を認められ、その後サマーラ県庁からイマーム職に任じられるとマドラサを去り、任地の農村に赴く。マハッラのイマームに任命された者がムダッリス、ムアッリム、あるいは子どもらのムアッリム (mu'allim-i şibyan) という呼称の教職資格も同時に認められ、そのうえで教育に従事するのは、制度化された、一般的な事象であった [Фархшатов 2006: 287]。

宗務協議会の管轄地域において、制度上、マハッラはロシア正教の教区に相当する共同体として、またイマーム等の宗教的な職務にある者は正教教区司祭に対応する聖職者として、それぞれみなされていた。長縄宣博がまとめるところによれば、マハッラは19世紀末には、帝国の法規により、1つの集会モスクを中心に少なくとも男子200名で構成され、そこに3名までの聖職者が、それぞれイマーム、ハティーブ、ムアッズインとして任命されるものと定められていた。しかし通例1つのマハッラには2名の聖職者が任じられ、1名がイマームとハティーブを兼務し、もう1名がムアッズインを務めた [長縄 2004: 3; Naganawa 2006: 105; Азаматов 1999: 89, 96-102; Фархшатов 2006: 289]。そしてイマームがムダッリスやムアッリムといった教職資格により、多くの場合モスクあるいはイマームの自宅に併設された、マドラサやマクタブで教鞭をとったのである。彼らは帝国行政のうえでも、また一般のムスリムからも、「ムッラー (mullā)」と呼ばれた。

つまり、マドラサで最も高い知的権威を認められる「師匠」は通例、そのマドラサが所在するマハッラに、所定のプロセスを経て公的に任命されたイマームであった。そのプロセスにおいて、イマーム候補者はウファ市に赴き、宗務協議会の資格審査試験を受けて適格であることを証明されねばならない。また彼は、任地となるはずのマハッラで郷長と村長の臨席のもと、マハッラ住民の家長らの2/3以上の賛成で選出される必要がある。これらの条件を満たしたうえで、イマーム候補者は、県庁により、適任と判断されればイマームに任命されたのである。こうして任命された者は、県庁よりウカーズ (указ, 政令) を授与されたた

36) 本稿注11を参照のこと。

め³⁷⁾、政令のムッラー (указный мулла, ūkāzlı mullā) と呼ばれた [長縄 2004: 3; Naganawa 2006: 106; Азаматов 1999: 96; Frank 2001: 120-133; Фархшатов 2006: 286-287; Коблов 1998 (1907): 13-15]。

そしてマドラサ高等教育は、このようなイマーム＝マドラサ教師候補者の養成において、特に宗務協議会での資格審査試験と関係する重要な役割を担うものであった。リザエッディンは、ニージニエ・チェルシルイのマドラサで資格審査試験の準備をする学生を教えていた頃の記憶として、次のように述べる。

協議会へ受験しに行く順番が来ると、多くのシャーキルドらがあちらこちらに *Mukhtaşar* を持ち歩き勉強してまわるけれども、私のシャーキルドらは *Mukhtaşar* の一部を読み、[それだけで十分であったため] 受験することを恐れなかったのだ。[HA PT, ф. 1370, оп. 1, д. 27: л. 11 6]

この記述から、資格審査試験が法学書 *Mukhtaşar al-Wiqāya* (表 7-17) の内容を問うものであったことが判明する。またリザエッディンは、次のようにも記す。

私のシャーキルドの 1 人が試験に行くことが必要になったその時、遺産分割学 (farā'id) を学んでいないシャーキルドは受験することができないという情報が明らかとなった。[中略] この時、私自身が遺産分割学を見たこともなく、学問的に知ってなどいなかった。私は無理に独学するという方法で *Sirājiya* を学び、そして私が学んだことをすべてシャーキルドにも学ばせた。このおかげでシャーキルドは試験に合格し、私のほうはこの学問を知った。[HA PT, ф. 1370, оп. 1, д. 27: л. 11 6]

この記述によれば、資格審査試験で出題される遺産分割学の問題への対策として、*Sirājiya*, すなわち Sirāj al-Dīn Abū Tāhir Muḥammad b. Muḥammad al-Sajāwandī (12~13 世紀) の *Kitāb al-farā'id al-sirājiya* [GAL GI: 378-379] を学習しておくことが、有効であったと考えられる。実は、資格審査試験で遺産分割学の知識が問われたということは、ヴァリドフも記しており [Валидов 1923: 32], 先行研究でも指摘されている [Сафиуллина 2003: 96]。また、1893 年 5 月 22 日付けで宗務協議会が発行した、遺産分割にかかわる規定を解説する通

37) ロシア連邦バシコルトスタン共和国ウファ市にあるバシコルトスタン共和国立中央歴史文書館 (Центральный государственный исторический архив Республики Башкортостан, ЦГИА РБ) は、マハッラのイマーム等の任命に際し発行されたウカーズを多数所蔵する。一例として、1895 年にサマーラ県庁からあるムッラーに発行されたウカーズの本文を以下に訳出する。「全ロシアの皇帝にして専制君主たる陛下のウカーズ、サマーラ県庁よりメンゼリンスク郡エルスパイキナ郷トイメトキナ村の農民ファッターフェッディン・ギリマーノフへ、以下の如く。彼は、スタヴロポリ郡ヴィセル村ヴィセルキのタタールの村の教区民らによる、彼らの村にある第 2 集会モスクへの、オレンブルグ・ムスリム宗務協議会にて行われる資格審査に適うムッラーとしての、法秩序に則った選出の後、1895 年 7 月 14 日付のサマーラ県庁の決定に基づき、上記モスクにおける、イマーム及びムアッリムの職位を有するムッラーとして任ぜられる。本ウカーズは彼ギリマーノフに、然るべき署名の後、官印捺印の上、1895 年 7 月 18 日に授与される。」こうしたウカーズ証書には番号が付された。この例に付された番号は 2714 である [ЦГИА РБ, ф. И-295, оп. 10, д. 46: リスト番号なし]。

達には、「遺産分割は〔中略〕『ファラーイズ』という書物の諸々のリワーヤに基づき、シャリーアの諸規定に則して行なわれる」という文言があるのだが〔СЦ ОМДС: 92-94〕、当該時代地域で普及していた遺産分割学書のうち、「ファラーイズ」という略称で呼ばれたものは、上述の *Kitāb al-farā'id al-sirājiya* であると考えてよい〔Сафиуллина 2003: 96-97; Халидов 1986 ч. 1: 201-203; Фролова 1996: 129〕。要するに、資格審査試験における遺産分割学からの出題のために、*Kitāb al-farā'id al-sirājiya* を学ぶ必要があったというリザエッディンの証言は、他の史料に照らしても、19世紀末頃の資格審査試験の一般的なありかたであったと言える。

つまり、19世紀後半ヴォルガ・ウラル地域のマドラサにおいて、高等程度の課程で最終的にイスラーム法学知識を獲得すべく諸学問を学習した学生、すなわちイマーム＝マドラサ教師候補者は、オレンブルグ・ムスリム宗務協議会の資格審査試験で適格と認められるため、それまでに得た知識を基礎として法学書 *Mukhtaṣar al-Wiqāya* と、遺産分割学書 *al-Farā'id al-sirājiya* を学習したのである。

ところで、資格審査試験を受けるため宗務協議会を訪れたイマーム候補者は、そこに備えられた受験者の登録簿に、自らについての情報を、師匠の名や学習した学問分野、書物の名称等を含めて記し、申請した。実は、この受験者登録簿について詳細な情報を書き残したのも、リザエッディンである。彼はソ連期にまとめた手稿の「試験の記録簿から、いくつかの書き写し」と題する箇所登録簿の概要を説明し、さらに一部を抜粋して筆写した³⁸⁾。

リザエッディンによれば、宗務協議会は資格審査試験受験者の登録簿を作成していた。それは2種類あり、彼はその1つを「短い記録簿 (qisqa daftar)」、もう1つを「長い記録簿 (ūzūn daftar)」と呼ぶ。「短い記録簿」は少なくとも1840年から1871年まで作成され、宗務協議会に保管されていた。「長い記録簿」は1841年以降のものが保管され、こちらは革命を経てソ連期になっても作成され続けたという。これらはアラビア文字表記のテュルク語で作成された。もともと「短い記録簿」は受験者が自ら記入するものであったが、後になると受験者は「長い記録簿」にのみ記入するようになり、「短い記録簿」の方は、カーディーが「長い記録簿」から情報を抜粋して筆写するという方法で作成するようになった。一方、「長い記録簿」には常に受験者が自ら記入していた。「短い記録簿」に記入された情報は、受験者の出身郡村、名、父親の名(父称)であり、資格審査試験で適格と認められた職位(「イマーム」等)も、ともに記載された〔НА УНЦ РАН, ф. 7, оп. 1, д. 13 (н. а.): л. 98-100〕。

本稿が特に問題とするのは、資格審査試験受験者が「長い記録簿」に記した情報である。受験者はこれを1人称の陳述のかたちで記述し、最後に署名した。記した情報は受験者により若干異なっていたが、基本的な記載事項は、年月日(露暦)、出身郡村、名と父称、ウ

38) この史料は〔НА УНЦ РАН, ф. 7, оп. 1, д. 13 (н. а.): л. 98-109〕であるが、管見の限り、先行研究で利用されたことのないものである。そもそも宗務協議会の資格審査試験受験者の登録簿については、筆者の知る限り、先行研究で解説されていない。

ファのムフティーのもとに来たということ、任地候補のマハッラの名称と人口、年齢、婚姻の有無、そしてマドラサにおける師匠の名と学習した学問分野および書物であった [HA УНЦ РАН, ф. 7, оп. 1, д. 13 (н. а.): л. 101-109]。一例として、1878年10月16日に受験した Jamāl al-Dīn Subhānqul ūghli という人物の、マドラサにおける師匠の名と、学習した学問分野および書物の記載部分を引用すれば、次のとおりである（角括弧内に、リザエッディンが学習した書物の表との対応を記す）。

アラビア語統語論 (‘ilm-i naḥw) から *Sharḥ-i Mullā* [表 5-1]、論理学から *Shamsiya* [表 4-9]、*Sullam* [表 6-7]、神学から *Aqā'id-i Mullā Jalāl* [表 4-17]、法学から *Mukhtaṣar-i Wiqāya* [表 7-17]、*Hidāya* [表 7-17, 注 26 参照] を、尊敬すべき我らの師匠 Dāmullā ‘Abd Allāh 師と Yār Allāh 師の御前で [学んだ] [HA УНЦ РАН, ф. 7, оп. 1, д. 13 (н. а.): л. 108 a]。

すなわち資格審査試験受験者は、法学と遺産分割学の試験そのものとは別に、マドラサ教育での師匠と、学習した学問分野および書物を、すべてではなくとも、具体名を挙げて申告することが要求されたのである³⁹⁾。

さて、以上の諸々の事実から、19世紀後半ヴォルガ・ウラル地域のマドラサ高等教育の目的は明らかに、マハッラにおいてイマーム、ハティーブ、マドラサ教師等の職位を務める人材を養成することにあつたと言える。イマーム等の聖職を志望するマドラサ学生は、宗務協議会の資格審査試験を受けねばならなかったが、そこで師匠の名と学習した学問分野や書物の名称を申告する必要があり、さらに試験では法学と遺産分割学の問題に解答せねばならなかったのだから、彼らが長い年月をかけて非母語のアラビア語で書かれた書物を学習したことは必然であつたろう。そしてロシア帝国行政の側からすればマドラサは、宗務協議会によるムスリム行政の末端を担うイマーム等の聖職者を養成するという、社会的機能を果たす施設であつたと言える。ただし、イマーム等の資格で就職することのみを目標とせず、イスラーム法学を中心とする諸学問に精通したウラマーとしての評価をも得ようと励む学生にも、上述のように、マドラサは相当の学識を提供し得たのである。

おわりに

19世紀後半、新方式教育が普及する直前のヴォルガ・ウラル地域のマドラサ教育課程は、初等程度のものについては、クルアーンやその一部の抜粋からなる書物を利用したクルアーン

39) リザエッディンが筆写した受験者登録簿のオリジナルは、筆者が知る限り見つかっておらず、現存しない可能性が高い。しかし筆者はバシコルトスタン共和国立中央歴史文書館において、1915～1916年の『試験記録簿 (Imtiḥān daftari)』を調査した。その内容によれば、1915年の段階では、受験者は記録簿に師匠の名は記入しても、学習した学問分野と書物の名称は書かなかったことが判明する。そのかわり受験者は、学習した学問分野の名称が記載されたマドラサ修学証書 (shahādāt-nāma) を別途提出した [ЦГИА РБ, ф. И-295, оп. 10, д. 621]。

ン暗唱、アラビア文字とイスラーム教義の基礎知識、イスラーム神秘主義の要素を含むような韻文、アダブと呼ばれる教養や行為規範、そしてハディースの教授・学習により構成されていた。高等程度の、「規定の授業」と呼ばれる課程は、アラビア語文法学、論理学、神学、法学基礎理論の諸々の学問分野の書物をこの順序で教授・学習し、学生が最終的にイスラーム法学知識を獲得することができるよう構成されていた。教授・学習に利用された書物は、最初等の教育段階ではテュルク語、ついでペルシア語で書かれたものであったが、高等程度の課程では、ほぼすべてが11世紀から17、18世紀頃までに著されたアラビア語の古典文献であった。高等程度の課程で利用された書物のうち、非常に普及していたものを特に例として挙げれば、アラビア語文法学については *Ba-dān* (表 4-1) や *Sharḥ-i 'Abd Allāh* (表 4-2)、論理学書である *Kitāb al-isāghūjī* (表 4-8) や *Sharḥ Hikmat al-'ayn* (表 6-1)、神学書 *Sharḥ al-Taftāzānī li-l-'Aqā'id al-nasaḥiyya* (表 4-12)、*Sharḥ al-Aqā'id al-aḍudiyya* (表 4-17)、*Sharḥ Mawāqif fī 'ilm al-kalām* (表 6-2) 等である。法学書は、*al-Nuqāya Mukhtaṣar al-Wiqāya* (表 7-17) をはじめとする、『ヒダーヤ』とその注釈や摘要が利用された。そしてリザエッディンは、こうした伝統的なマドラサ教育課程において得た知識を基礎として学習・研究を進めてゆき、後にイスラーム改革論を唱道するウラマーとして著名となっていったのである。

また、オレンブルグ・ムスリム宗務協議会の管下におけるマハツラと、イマームをはじめとする聖職の制度化の実状、とりわけ聖職志望者がマドラサで師匠のもと「規定の授業」のイスラーム諸学を修め、宗務協議会での資格審査試験の際にその修学歴を申告したうえで、法学と遺産分割学からの出題に解答せねばならなかったという事実からは、アラビア語の書物に満ちたマドラサ高等教育の目的と社会的な機能が、制度と実態のいずれにおいても、ロシア帝国行政下のマハツラ聖職者養成であったことが明白である。その一方で、マドラサがムスリム社会の内部で果たした役割について考察してみると、マドラサには、いま一つの重要な社会文化的機能があったと言えるだろう。それはアラビア語の古典文献からなるイスラームの学術文化を、その担い手であるウラマーを養成することで保ち、継承するという機能である。このことの意味は、当該地域が地理的にヨーロッパ部ロシアのなかに位置するという事実には照らせば、決して小さくはない。

本稿の結論は以上のようなものであるが、ここで明らかとなった19世紀後半ヴォルガ・ウラル地域のマドラサ教育について、関連する他の時代地域の教育の問題と考え合わせることでより判明する事柄を、以下に簡単に指摘しておきたい。

第1は、当該時代地域のマドラサで利用された書物と、その教育課程の由来についてである。ヴァリドフはヴォルガ・ウラル地域の伝統的なマドラサのカリキュラムが「ブハラ・タイプ」であったとし [Валидов 1923: 21]、先行研究の多くも「ブハラ式」であったと述べている [小松 1983]。このように語られてきたことは、本稿が示した事実を、トルキスタンのマドラサ高等教育で利用された書物や、その教育課程と実際に比較すれば、実証されるの

である。19世紀の(西)トルキスタンのマドラサ教育課程について磯貝健一は、教授・学習に利用された書物が課程の初めから順に、『汝知れ』、『ムイヅイー』…であり、そして課程そのものはアラビア語文法学、論理学、思弁神学、法学基礎理論、ハディース学、クルアーン注釈学、法学といった諸々の学問分野を、この順序で教え学んでゆくものであったと説明する〔磯貝 2009: 106-112〕。『汝知れ』とは *Ba-dān* (表 4-1) であり、『ムイヅイー』は注釈書 *Sharḥ-i 'Abd Allāh* (表 4-2) の原典であるが、その他の書物についても〔磯貝 2011: 資料 3〕、また課程そのものについても、トルキスタンのものとヴォルガ・ウラル地域のそれは相当程度共通する。すなわちヴォルガ・ウラル地域のマドラサ教育課程は、教授・学習に利用された書物(原典、注疏)も含め、確かにトルキスタンから将来されたものであると言える⁴⁰⁾。

第2は、1870年の「異族人教育規則(Правила о мерах к образованию населяющих Россию инородцев)」に基づく諸学校が徐々にであれ増えてゆき、さらに19世紀最後の10数年以降、新方式教育を支持し、普及させようとするムスリム知識人が数を増すという歴史的状況のなか、本稿が示したような伝統的教育課程によるマドラサが、厳しい批判の対象となっていたことにかかわる問題である。そうした批判の要因は、様々な史料に依拠すれば複数挙げることが可能であり、実際に多数の先行研究で言及されてきている。ただ、本稿がこれまで検討してきたマドラサ教育課程、そしてその目的や社会的機能の諸点からすれば、確かな要因を1つ指摘することが可能である。それは、マドラサ高等教育が聖職志望者のためのものであり、他のキャリアを志す者には役に立たなかったということである。そのうえ初等程度の教育内容も、すでに幾多の先行研究でも指摘されるように宗教陶冶を中心としており、しかも学習する子どもらは非母語であるペルシア語やアラビア語の書物の内容を学ぶことを余儀なくされた。それゆえ子どもらは、聖職者をめざすわけでもない限り、学習意欲を失いがちであったろう。要するに、伝統的なマドラサ教育はウラマー養成に特化しており、皆教育にも一般教育にも、そして当然ながらウラマーの養成を目的とするわけではない他分野の専門教育にも、適するようなものではなかった。それゆえ、ロシア帝国において『『教育の身分制原理』が揺らぎ』始め〔橋本 2010: 13〕、ムスリム住民にとっては、「異族人教育規則」によってマドラサ以外の学校の選択肢が視野に入るようになり〔Dowler 2001: 78-79〕、さらに学校教育の先にあるはずの、より広い職業選択の可能性が見えるようになり

40) ペルシア(タジク)語話者が皆無のヴォルガ・ウラル地域で、ペルシア語で書かれた書物(表 4-1, 4-2 等)がマドラサ教育に利用された理由についても、トルキスタンのマドラサ教育課程が書物も含めてヴォルガ・ウラル地域に将来された結果であると言える。ただし、この19世紀後半の中央ユーラシアのマドラサ高等教育課程が、イスラーム中世以来のマドラサ全般に共通するものであったと言うことはできないだろう。「マドラサ」という言葉で同じように呼ばれる教育施設であっても、その実態は時代や地域により様々に異なるものであったと考えられる。イスラーム中世のマドラサについて、代表的な先行研究は阿久津 1999 で紹介されている。19世紀のオスマン帝国におけるマドラサの状況については、秋葉 1996 を参照。

始めた時、伝統的なマドラサ教育を批判する言辞が支持を集めるようになったと考えることができる。

しかし新方式以前の伝統的なマドラサやマクタブで利用された書物や、あるいはそれらに基づく教育内容が、そう簡単に棄てられなかったこともまた事実である。このことを示す1つの事例は、ウラル南麓出身のムスリム知識人ムハンマド・ガブドゥルハイ・クルバンガリエフ (Muhammad 'Abd al-Hayy Qurbān-'Aliyif, 1889-1972) が東京代々木の東京回教学校内に設立した印刷所で [Нисияма 2011; 松長 2009], 1930年代に印刷発行した諸々の書物のなかに見いだされる。クルバンガリエフは、新方式を支持したムスリム知識人らの著作と同時に、*Ba-dawām kitābī* (表 1-3) や *Ākhir zamān kitābī* (表 1-5), さらに新方式支持者の言説で特に「旧方式 (uṣūl-i qadīm)」を象徴する書物とみなされ批判された *Haftiyak* (表 1-2) までもを、印刷発行していたのである [Dündar & Misawa: 2010]。この事例からわかるように、新方式教育を研究対象とするならば、教育の方法や制度枠組についてのみならず、教育内容の問題についても、そこに見いだされる伝統を継承する要素と、新規に導入された要素がそれぞれいかなるものであったのかという視点から、丁寧に検討してゆく必要がある⁴¹⁾。これは今後の課題としたい。

[付記] 本稿の一部は、平成 22~23 年度科学研究費補助金 (研究活動スタート支援, 課題番号: 22820041) による研究成果である。

参考文献

- ФЧ 1: Фахретдиновские чтения No. 1 «Просветительские традиции ислама в Урало-Поволжье». Нижний Новгород: Медина, 2009.
- ФЧ 2: Фахретдиновские чтения No. 2. «Инновационные ресурсы мусульманского образования и культуры». М. и Нижний Новгород: Медина, 2011.
- GAL: Brockelmann, Carl. *Geschichte der arabischen Litteratur*.
- НА РТ: Национальный архив Республики Татарстан.
- НА УНЦ РАН: Научный архив Уфимского научного центра Российской Академии Наук.
- СЦ ОМДС: Сборник циркуляров и иных руководящих распоряжений по округу Оренбургского магометанского духовного собрания 1836-1903 г. Уфа: Губернская типография, 1905.
- СВР АН УзССР: Собрание восточных рукописей Академии наук Узбекской ССР. т. I-XI. Ташкент: Изд. Академии наук УзССР.

41) 事例の1つとして、新方式教育を支持するリザエッディンが提示した行為規範教育の内実が大方向において、中央ユーラシアの伝統的なマドラサ教育で利用されていたアダブ文献の内容と一致するという事実については、Исогой 2011 を参照のこと。

ЦГИА РБ : Центральный государственный исторический архив Республики Башкортостан
(Государственное казенное учреждение Республики Башкортостан «Центральный
исторический архив РБ»).

秋葉 淳 (1996) オスマン朝末期イスタンブルのメドレセ教育 —— 教育課程と学生生活 —— 『史学
雑誌』 105 (1), 62-84.

阿久津正幸 (1999) 中世イスラム世界における教育施設マドラサの政治的機能の再検討 『史学』 69
(1), 141-158.

Азаматов Д. Д. (1999) Оренбургское магометанское духовное собрание в конце XVIII-XIX
вв. Уфа : Гилем.

Азаматов Д. Д. (2006) ОМДС. // Прозоров, С. М. (ред.) Ислам на территории бывшей
Российской империи : Энциклопедический словарь. т. 1. М. : Вост. лит. РАН,
319-321.

Әмирханов, Р. М. и др. (ред.) (2003) Ризаэддин Фәхредин : мирасы һәм хәзерге заман.
Казань.

Байбулатова, Лилия (2006) «Асар» Ризы Фахредина : источниковая основа и значение
свода. Казань : Татар. кн. изд.

Баишев, Ф. Н. (1996) Общественно-политические и нравственно-этические взгляды Ризы
Фахретдинова. Уфа : Китап.

Булгаков, Р. М. (2002) Описание восточных рукописей Института истории, языка и литера-
туры : часть 1. тюркские рукописи, вып. 1. произведения XII - начала XVIII века.
Уфа : Гилем.

Булгаков, Р. М. (2008) Краткий обзор тюркских рукописей Ризаэддина бин Фахредина и
его исламоведческих работ советского периода, хранящихся в Научном архиве
УНЦ РАН. // Исламская цивилизация в волго-уральском регионе. Уфа, 26-46.

Dowler, Wayne (2001) *Classroom and Empire : The Politics of Schooling Russia's Eastern National-
ities, 1860-1917*. Montreal & Kingston, London, Ithaca : McGill-Queen's U. P.

Dudoignon, Stéphane A. (1997) Qu'est-ce que la «qadimiya»? : Éléments de sociologie du traditional-
isme musulman, en Islam de Russie et en Transoxiane (de la fin du XVIII^e siècle au début du
XX^e). In : Dudoignon, Stéphane A., Dämîr Is'haqov and Râfyq Mõhâmmâtshin (eds.)
*L'Islam de Russie : Conscience communautaire et autonomie politique chez les Tatars de la
Volga et de l'Oural, depuis le XVIII^e siècle*. Paris : Maisonneuve & Larose, 207-225.

Dündar, Ali Merthan & Nobuo Misawa (2010) *Books in Tatar-Turkish printed by Tokyo'da matbaa-i
İslamiye (1930-38)*. Tokyo : Toyo Univ.

Дмитриева, Людмила В. (2002) Каталог тюркских рукописей Института востоковедения
Российской академии наук. М. : Вост. лит.

Фархитов, М. Н. (1994) Народное образование в Башкирии в пореформенный период 60-

- 90-е годы XIX в. М. : Наука.
- Фархитов, М. Н. (2006) Мусульманское духовенство. // *Прозоров, С. М.* (ред.) Ислам на территории бывшей Российской империи : Энциклопедический словарь. т. 1. М. : Вост. лит. РАН, 286-292.
- Frank, Allen J. (2001) *Muslim Religious Institutions in Imperial Russia : The Islamic World of Novouzensk District and the Kazakh Inner Horde, 1780-1910.* Leiden, Boston, and Köln : Brill.
- Фролова, О. Б. (ред.) (1996) Арабские рукописи Восточного отдела Научной библиотеки Санкт-Петербургского Государственного университета. СПб.
- Гилязутдинов, С. М. (2002) Описание рукописей на персидском языке из хранилища Института языка, литературы и искусства. Казань : Фикер.
- Госманов, Миркасыйм (1984) Катлаулы чорның каршылыклы өкеле. // *Казан утлары* 1 (1984), 142-157.
- Госманов, Миркасыйм (1994) Каурый каләм эзенән : археограф язмалары. Казань : Татарстан китап нәшрияты.
- 濱田正美 (2010) 『Chahār Faṣl (Bidān) / Muḥimmāt al-Muṣlimin』 京都大学大学院文学研究科.
- 橋本伸也 (2010) 『帝国・身分・学校 —— 帝政期ロシアにおける教育の社会文化史 ——』 名古屋大学出版会.
- 磯貝健一 (2009) イスラーム法とペルシア語 —— 前近代西トルキスタンの法曹界 —— 森本一夫 (編) 『ペルシア語が結んだ世界 —— もうひとつのユーラシア史 ——』 北海道大学出版会, 97-128.
- 磯貝健一 (2011) 前近代中央アジアのマドラサにおける教育カリキュラム イスラーム地域研究早稲田大学拠点グループ 1a 「イスラームにおける知の理念と実践」 研究会報告レジュメ. 2011 年 1 月 29 日, 早稲田大学.
- 磯貝(生田) 真澄 (2009) ロシア帝政末期ムスリム知識人による女性をめぐる議論 —— 雑誌『スユム・ビケ (Süyüm Bika)』 (カザン, 1913-1918) を中心に —— 『神戸大学史学年報』 24, 1-32.
- Исогой, Масуми (2011) «Ильм-и ахлак» Ризаэдина б. Фахреддина (1858-1936) и история понятий «ахлак» и «адаб». // *Наганова, Н., Усманова, Д. М., Хамамото, М.* (ред.) Волго-Уральский регион в имперском пространстве XVIII-XX вв. М. : Вост. лит., 93-120.
- Kefeli, Agnès (1997a) Constructing an Islamic Identity : The Case of Elyshevo Village in the Nineteenth Century. In : Brower, Daniel R. and Edward J. Lazzarini (eds.) *Russia's Orient : Imperial Borderlands and Peoples, 1700-1917.* Bloomington and Indianapolis : Indiana U. P., 271-291.
- Kefeli, Agnès (1997b) Une note sur le rôle des femmes tatares converties au christianisme dans la réislamisation de la Moyenne-Volga, au milieu du XIX^e siècle. In : Dudoignon, Stéphane A., Dämîr Is'haqov and Râfyq Mōhāmmātshin (eds.) *L'Islam de Russie : Conscience commu-*

- nautaire et autonomie politique chez les Tatars de la Volga et de l'Oural, depuis le XVIII^e siècle*. Paris : Maisonneuve & Larose, 65-71.
- Kefeli, Agnès (2001) The Role of Tatar and Kriashen Women in the Transmission of Islamic Knowledge, 1800-1870. In : Geraci, Robert P. and Michael Khodarkovsky (eds.) *Of Religion and Empire : Missions, Conversion, and Tolerance in Tsarist Russia*. Ithaca and London : Cornell U. P., 250-273.
- Kemper, Michael (1998) *Sufis und Gelehrte in Tatarien und Baschkirien, 1789-1889 : der islamische Diskurs unter russischer Herrschaft*. Berlin : Klaus Schwarz Verlag.
- Халидов, А. Б. (ред.) (1986) Арабские рукописи Института востоковедения Академии наук СССР : Краткий каталог. ч. 1-2. М. : Наука.
- Хисамитдинова, Ф. Г. и др. (ред.) : (2006) Проблемы башкирской, татарской культуры и наследие Ризы Фахретдинова. Уфа.
- Хөсәйенов, Гайса (1997) Ризаитдин бин Фәхретдин : Тарихи-биографик китап. Уфа : Китап.
- Хусаинов, Г. Б. и др. (ред.) (1988) Творчество Ризы Фахретдинова : исследования, материалы. Уфа : Башкирский научный центр уральского отделения АН СССР.
- Коблов, Я. Д. (1916) Конфессиональные школы казанских татар. Казань : Центральная Типография.
- Коблов, Я. Д. (1998) (переизд. 1907 г.) О магометанских муллах : Религиозно-бытовой очерк. Казань : Иман.
- 小松久男 (1983) ブハラとカザン 護雅夫 (編) 『内陸アジア・西アジアの社会と文化』山川出版社, 481-500.
- 小松久男 (1996) 『革命の中央アジア —— あるジャディードの肖像 —— (中東イスラム世界7)』東京大学出版会.
- Leder, S. (1994) *Riwāya*. In : *ET² VIII*, Leiden : E. J. Brill, 545-547.
- Махмутова, Альта Х. (1982) Становление светского образования у татар (Борьба вокруг школьного вопроса. 1861-1917). Казань : Изд. Казанского университета.
- Махмутова, Альта Х. (2003) Лишь тебе, народ, служенье! (История татарского просветительства в судьбах династии Нигматуллиных-Буби). Казань : Магариф.
- Мәрданов, Раиф и др. (ред.) (1999) Ризаэтдин Фәхретдин : фәнни-биографик ыентык. Казань : Рухият.
- 松長 昭 (2009) 『在日タタール人 —— 歴史に翻弄されたイスラーム教徒たち ——』(ユーラシア・ブックレット134) 東洋書店.
- 長縄宣博 (2003) ヴォルガ・ウラル地域の新しいタタール知識人 —— 第一次ロシア革命後の民族 (ミルラト) に関する言説を中心に —— 『スラヴ研究』50, 33-63.
- 長縄宣博 (2004) 日露戦争期ロシア軍のなかのムスリム兵士 『21世紀COEプログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集5 : ロシアの中のアジア/アジアの中のロシア (II)』北海道大学スラブ研究センター, 1-19.

- Naganawa, Norihiro (2006) Molding the Muslim Community through the Tsarist Administration : Maḥalla under the Jurisdiction of the Orenburg Mohammedan Spiritual Assembly after 1905. *Acta Slavica Iaponica* 23, 101-123.
- Naganawa, Norihiro (2007) Maktab or School? Introduction of Universal Primary Education among the Volga-Ural Muslims. In : Uyama, Tomohiko (ed.) *Empire, Islam, and Politics in Central Eurasia (Slavic Eurasian Studies No. 14)*. Sapporo : Slavic Research Center., 65-97.
- Нисияма, Кацунори (2011) Российские мусульмане-эмигранты в Японии в период между двумя мировыми войнами. // *Наганава, Н., Усманова, Д. М., Хамамото, М.* (ред.) *Волго-Уральский регион в имперском пространстве XVIII-XX вв.* М. : Вост. лит., 267-289.
- 大石真一郎 (1996) カシユガルにおけるジャディード運動 —— ムーサー・バヨフ家と新方式教育 —— 『東洋学報』 78 (1), 95-120.
- Pedersen, J. & G. Makdisi (1985) Madrasa : I. The Institution in the Arabic, Persian and Turkish Lands. In : *ET²* V, Leiden : E. J. Brill, 1123-1134.
- Рахимов, Сулейман (1997) Социально-правовой статус татарских учебных заведений последней четверти XVIII - нач. XX вв. // Дюдуаьон, С. А., Исаков Д., Мухаметшин Р. (ред.) *Ислам в татарском мире : история и современность (Панорама-форум 1997 No. 12 спец. вып.)*. Казань, 71-82.
- Riḍā' al-Dīn b. Fakhr al-Dīn (1908) *Āthār 2 jild 15 juz'*. Ürinbürgh (Orenburg) : Karīmūf, Ḥusaynūf wa shirikā'sī.
- Риззэтдин Фәхретдин (Гайнетдин, М. ред.) (2009) Тәржемәи хәлем. Казань : Иман.
- Сафиуллина, Резеда Р. (2003) Арабская книга в духовной культуре татарского народа. Казань : Изд. Алма-Лит.
- Türkoğlu, İsmail (2000) *Rusya Türkleri arasındaki Yenileşme Hareketinin Öncülerinden Rızaeddin Fahreddin*. Istanbul : Ötüken.
- Валидов, Джамалютдин (1923) Очерк истории образованности и литературы татар (до революции 1917 г.). М. : Государственное изд.